

芥川だより

発行日***2017年3月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



***** 一部100円です *****

幼友達のマーちゃん



葬式の時、マーちゃんの姉である京ちゃんが「よっちゃん、よう来てくれちゃった。マーは人つきあいが悪い子だったからなあ」、側にいたお兄さんも「マーは小さい時から、胆石があって体が弱かった」と。この二人の言葉を聞いて、私の謎は解けた。小さな山奥の村で、マーちゃんと同じ年に生まれ育った私は、彼のことをよくわかっていたつもりだったのだが、わかっていなかったと悔いた。

彼は、小さい時からむずかしい本が好きで、芥川龍之介や三島由紀夫の小説をよく読む文学少年であった。風貌も芥川龍之介に似て背も高くすらりとした体つきをしていた。屋外で遊ぶよりも家の中で本を読むのを好むタイプである。

そんな彼を私は、どうしてみんなともっと遊ばないのだろうか。彼の家は村の中でも裕福な家であったから、お高くとまって貧乏人の私らとは遊びたくないのだろうかと子供心に思っていた。しかし、姉弟の話を知れば彼のつきあいの悪さも病気が影響していたのだろうと納得した。病気を抱えながらも周りの友達に、まったくその気配を感じさせることなく生活していたので気づかなかったのだ。

彼は、大学を卒業して小学校の教師になった。お兄さんの話では、校長の空席がなく長く教頭をしていたという。やっと校長になれた3年目に胆石が大きくなって手術を受け、半年後に動脈瘤破裂に襲われた。一時は回復しそうに見えたが急に悪化し危篤状態が年末から2ヶ月余りも続いていると田舎の母が連絡してきた。久しく会っていない彼であったが、なんとか彼を楽にしてやりたい衝動にかられた私は病院へ行き集中治療室に眠る彼の耳元で「よう頑張った、もう楽になれ」と囁いた。その数日後、彼は息を引き取った。彼が校長する小学校の終業式が終わった午後であった。もし、マーちゃんがいなかったら、私の人生は変わっていたにちがいない。本に親しむことも勉強することもしなかっただろう。彼は私に日々刺激を与えてくれていたのである。人つきあいが悪そうに思えたのも持病がなせる仕業だったにちがいない。幼友達はかけがえのないものだ。

死をめぐるあれやこれ(30)

石川 吾郎

「花朝」再び

ちょうど一年前のこの欄で、「花朝」という言葉を取りあげた。故宮博物館の中国絵画の日めくりカレンダーで初めて出会ったこの言葉は、旧暦二月の満月の日を表している。この時期はちょうど、梅や桃・杏や桜など春の花が咲く頃にあたり、華やかな季節になる。

朝、この言葉に出会った日の驚きと幸せな感じは忘れられない。

* * *

去年ここで取りあげなかったことがあったことに気づいた。それは、西行法師の歌といわれる

願わくば 花の下にて春死なん

その如月の望月のころ

という歌。そして西行法師はこの願い通りの死を迎えたという。この「如月の望月のころ」がまさに今取りあげている「花朝」の日に他ならないということなのだ。

* * *

そして四字熟語「花朝月夕」を作る「月夕(げっせき)」は、旧暦九月の満月の日、つまり仲秋の日のことだということを今回も付け加えておこう。



巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
森友学園問題の早わかりQ&A	伊藤明	2
素老人☆よもだ帳	坂本一光	6
哲学屋のつぶやき	祖蔵哲	8
大峰奥駈道	梵店主	11
おちよこチヨイぼけ	A O	12
孫ワオツチング	福田圭	13
大人の今昔物語	石川吾郎	13
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	14
オクラの山たより	困了生	15
我がおくのほそ道の旅	成瀬和之	16
米国紀行	河原林成行	17
インターネット老人会	大江雄鬼	20
編集後記	嘉	21
女90年の軌跡	眞純	22
俳句	土田裕 影山武司	22

みんなで知ろう日本の危機 (19)

森友学園問題の早わかりQ&A

伊藤 明

はじめに

二月の後半になってわかに日本中のマスコミが注目して、大疑獄事件に発展すべき問題が明るみにされてきたので、今回これについて取りあげます。ただこの問題は進行中の事件ですので、この文章が出るころには旧聞に属するものになったり、訂正が必要になっていたりしている

かもしれません。しかし事が重大だと思われまので取り上げることになります。「国有地が学校法人・森友学園に只同然の安い値段で払い下げられた」問題。問題が大きく多岐にわたりますので、今回はQ&A方式にしました。これなら拾い読みしてもらってもできると思います。舞台が関西在住の者には身近かであることから、無関心ではいられません。ましてや巨大な不正が明らかにされれば政権が吹っ飛ばす事件であり、このようにも腐敗した政権は吹っ飛ばす必要があると思われるのです。ぜひ皆さんにも注目していただきたいと思います。

Q & A

◆森友学園問題って何なん？

まず森友学園の問題のポイントは、国民の財産である国有地が、評価額の九割引きというあり得ない安値で、政権と親しい関係者である団体・森友学園に売却されたということです。国の財産が不当な安価で売り払われたという深刻な問題です。まさに強力な政治権力の腐敗を、そのまま表した問題といえます。

またこの国有地を格安で買いつつた森友学園が、とんでもない団体だということとです。さらに政権の中核と、この森友学園がともに「日本会議」で深く結びついているという点が重要です。

この経過には、数々の前例にはない手続きが行われ、異常に森友側を優遇しており、政治家が関与したのではないかと強く疑われているのです。これほど規模

の大きな「不正」は、官僚だけで行うことは考えられません。共産党の志位氏は「これは異常で奇怪な取引です。政治家の関与なしには、こういうことは起こりえないと思います。どういう力が働いたのか、きちんと究明する必要があります」と述べていますが、これは全く正しい指摘です。

◆どんな経過なん？

・大阪府豊中市にある評価額九億五六〇〇万円の国有地が二〇一六年六月に森友学園に一億三四〇〇万円という市場価格の十分の一の価格で払い下げられました。国はこのとき地下埋設物(ゴミ)の撤去及び処理費用が八億一九七四万円と算定し、この金額を鑑定評価額から割引をして売却しているのです。

さらにこれに先だつて、国は森友学園に対して、土壌改良と埋設物撤去工事に金として、二〇一六年四月六日に一億三二七六万円を森友学園に支払っています。つまり国は森友学園に対して二百万円ほど、つまりほとんど同然の値段で、八七七〇平米の国有地を提供したことになります。さらにさらにこれとは別に、この土地に建設中の小学校の建物、国土交通省「平成二七年度サステナブル建築物等先導事業」に採択され、六千万円余りの補助金支給が決定されているといえます。これを合合わせると、森友学園は、土地を買って校舎を立てることによって、土地代金がタダになるどころか、お金がもらえた、ということになるのです。こ

の国有地の売却が、あまりにも破格で常識はずれのものであることは明らかです。この疑惑が発覚したのは、この国有地売却の価格だけが公表されておらず、不審に思った木村真・豊中市議が売買契約書類の公開請求をしたが、いつまでたつても公開請求に応じないため、大阪地裁に提訴して、朝日新聞が取引の不透明さを報道した結果、近畿財務局が一転して二月十日に売却価格を公表したのでした。そこではじめて売却価格が不当に低い事が発覚したのです。

さらに三月二日になって自民党参議院議員の鴻池祥肇氏の事務所が、二〇一三年八月から昨年三月の間に、森友学園の籠池氏側から十五回にわたって陳情を受けていたことが判明しました。この陳情の内容そのままに、国有地の賃貸借が実現し、賃料が引き下げられ、不動産購入価格が引き下がり、森友学園の希望通りに、ほとんどタダ同然で国有地が森友学園の手にわたっていることが明らかにされているのです。

この鴻池氏は麻生派の大物議員で、三月二日に共産党・小池氏の質問に自分の事務所の記録内容が取りあげられ、慌てて記者会見を開いたものです。その場で森友学園の籠池夫婦が、持ってきた紙包みを渡そうとしたとき「無礼者」と投げ返したと、芝居じみた演技を見せていました。しかし鴻池議員は、二〇〇八年には塚本幼稚園で行われた講演会で、塚本幼稚園を絶賛していたという事実があります。このように、森友学園側は、幾度

にもわたり安倍政権に近い政治家に便宜を求めて接触をしていることが判明しています。

◆森友学園って何なん？

森友学園とは、特異な教育で最近しばしば話題にあがっていた大阪市の「塚本幼稚園」を経営する学校法人です。この森友学園が「瑞穂の國記念小學院」という小学校を作ろうとしている過程で、さまざまな疑惑が浮上してきているのです。この学校は「安倍晋三記念小學院」という名で寄付を募っていたことも暴露されています。学校法人「森友学園」の理事長である籠池泰典氏は日本会議の大阪代表・運営委員だということです。まさにこの塚本幼稚園の名誉園長（この問題が明るみされてから辞任をした）だったのが、**安倍首相の夫人・安倍昭恵氏**です。

◆塚本幼稚園って何なん？
森友学園の幼稚園「塚本幼稚園」では、園児に「教育勅語」や「五箇条の御誓文」を毎日朗唱させ、伊勢神宮への参拝・宿

泊旅行をさせています。また、おもらしするとパンツをカバンにそのまま入れて帰らせる、水を飲むことを禁止している、などの事実が報告されています。また田植え行事で籠池理事長が木道から子供たちを次々田んぼに無理やり突き落とす動画もあります。これらは幼児虐待にあたる行為ともいえます。

また中国籍の子どもが入園していましたが子供や先生からいじめを受けて退園したということもあります。保護者の一人は「中国・韓国は悪い国だからというふうな指導をしていて、クラスメートで中国の子がいたんですが、その方も突然いなくなつて、いじめられていたつて、それも先生と生徒にいじめられていたと証言しています。この件について報道ステーションのインタビューでは理事長・籠池氏は「我々の教育方針とは合わないわけですよ。それなのにどうして入ってきたのつて。保護者がちよつとおかしいんじゃないかなど。変な人ですよ、おぞましい」などと述べています。籠池氏は、中国・韓国へのヘイトスピーチでも有名なのです。実際、塚本幼稚園から保護者に送られた手紙には、「邪な考えを持った（名前は日本人なのですが）在日韓国人である、支那人は近づいてきます」「韓国人と中国人は嫌いです」と記されていたといえます。同園の昨年十二月の保護者向け冊子では「(韓国の)心を引き継いだ人たちが日本人の顔をしてわが国に存在することが問題」と述べたり、園のホームページ上で「韓国・中国人等の元不良保

護者」と一時掲載し後に「K国・C国人等」に改めた、といったこともありました。

さらにまたテレビで流された塚本幼稚園の子どもによる運動会選手宣誓が衝撃的で話題を呼びました。「安倍総理ガンバレ 安倍総理ガンバレ」大人の人たちは日本が他の国々に負けぬよう 尖閣諸島竹島 北方領土を守り「日本を悪者として扱っている 中国 韓国が心を改め」「歴史教科書でウソを教えないようにお願いします」「安保法制 国会通過よかったです」と幼稚園の子どもたちに言わせています。

◆何でそんな幼稚園に子どもを入れる親がいるのん？

塚本幼稚園の国粹主義的・軍国主義的な思想の傾向に共感した親が子供を入園させる場合も、少数あるとは思われますが、次のような事情もあるといえます。

つまり塚本幼稚園の送迎バスが、アニメ映画「となりのトトロ」に出てくるようなネコバスで子どもの心に取り入っているのです。実際、安倍昭恵氏のフェースブックには、このネコバスの正面で、昭恵夫人がにこやかにたたずんでいる写真が載っていました。子どもの中には、このネコバスが気に入って、この幼稚園に入りたいたいとだだをこねる子がけっこういた、ということでした。さらに、この幼稚園の歌をつくっているのが、安倍政権に近い関係だというAKBで知られる作詞家の**秋元康氏**である、ということも、知

つておいてよいことだと思います。

◆「日本会議」って何なん？

ここに出てくる「日本会議」とは、安倍政権のコアな応援団となっている日本最大の右派組織です。安倍政権のほとんどの閣僚がそのメンバーになっています。神社本庁を筆頭とする神社界と、数々の右派系の新興宗教団体が、この「日本会議」を強力に支えています。

日本会議は、戦後の民主主義下の日本社会と日本国憲法を否定して、戦前の明治憲法下の軍国日本、「祭政一致」のファシズム社会を目指していると言えます。全国に八万以上の神社を擁する神社本庁が日本会議を強力に支持し、ほとんど一体となつており、この力が非常に大きいものといえます。戦前・戦中期に国家神道にもとづいて厚く保護された神社界には、戦前への回帰への願望がとよく残っているのです。

こうしたいわば「宗教右派の統一戦線」が、保守系政治家と手を結び（これは自民党には限らない）、日本社会を戦前のファシズム社会に戻そうとしている図式が描けます。

また最近、日本会議は「美しい日本の憲法をつくる国民の会」なる団体を立ち上げて、一千万人を目指して全国各地の神社の境内で改憲賛成の署名運動を繰り広げています。初詣に神社に出掛けたみなさんは、そこにこの組織の大きなポスター（不気味な笑顔を見せる和服の元テレビキャスターの女性を大写ししてい

る)を、見られたことがあるのではないかと思います。このように日本会議は、憲法(とりわけ九条)の改定に躍起になって取り組んでいるのです。

◆安倍昭恵夫人の関わりは？

安倍首相夫人・昭恵氏が森友学園に深く関与していたことが、明らかになってきています。夫人は塚本幼稚園の教育方針を絶賛し、この教育方針こそ今度出来る小学校(瑞穂の國記念小学校)に引き継がなければならないと語っていたのです。「せっかく塚本幼稚園で培われたシンの通った園児が、ほかの小学校の教育

によって台無しにされてはいけない」などと語っている動画が残っていてネット上でみられます。これは軍国主義を賛美する内容であり、中国・韓国を蔑視する塚本幼稚園の教育方針が、日本国憲法とその下で作られた教育基本法違反であることは明らかです。昭恵夫人は明確に憲法違反・法律違反の発言を堂々と父兄の前で語っていたのです。それこそが名誉校長の証拠でもあります。頼まれて嫌々引き受けたなどという安倍首相の国会答弁は、真つ赤なウソということ。教育方針に共感をして名誉校長になっているのです。

森友学園が運営する塚本幼稚園では、園児たちが「日本国、日本国のために活躍されている安倍晋三内閣総理大臣を、一生懸命支えていらっしやる昭恵夫人、本当にありがとうございます。ぼくたち・わたしたちも頑張りますので、昭恵

夫人も頑張ってください」と話すと、安倍昭恵夫人は「感動しちゃいました」と話す動画も広がっています。子どもたちの言葉に、涙を見せる昭恵夫人の姿もみられます。

安倍首相は何度も、「妻や自分が直接関与していたら辞める、職を賭して答弁している」と国会答弁しています。野党はこの昭恵夫人の画像を国会で取り上げ、名誉会長昭恵夫人の国会招致を求め、国民の前で二年前の講演で語られた言葉の真意を、国民の前で追及する必要があるだろうと考えます。

また野党の追及に対して安倍首相は「妻は私人」だと、言い逃れをしていました。しかし三月二日の参院予算委員会では、政府が昭恵氏に対して五人の公務員をスタッフとして付けていることが明らかにされました。現実には昭恵夫人には五人の公務員が付き添っている立派な公人です。これらの付き添い人は難しい国家公務員試験に合格した優秀な公務員であり、税金からその人件費が出ているわけです。

◆安倍首相本人の関わりはどうなん？

安倍首相本人が、この問題と直接にかかわったという証拠はまだ出てきてはいないようです。安倍首相は、妻や自分が直接関与していたら辞める、職を賭して答弁していると国会答弁をしています。安倍氏は、シラを切り続けるつもりと思われませんが、安倍氏と森友学園の関係は、ともに日本会議のメンバーであることか

らしても、とても深いものと考えられます。

じつessいに、先日記者会見で籠池理事長は、安倍晋三氏からの年賀状を読み上げていました。政治家の事務所には年賀状や暑中見舞いなどを送る相手がリストアップされているのですが、単なる支援者には送らないが多額の献金をしてくれたり特別な付き合いのある相手なら支援者にも送るのが通例です。ということは安倍事務所のリストには籠池理事長の名前や住所が「特別な支援者のリスト」に記載されていることになるのです。

◆維新の関わりはどうなん？

森友学園が建設中の「瑞穂の國記念小学校」へのスピード認可に疑いの目が注がれています。実はそもそもその申請をめぐっても新たな疑惑が浮上しています。大阪府は二〇一二年に「私立小学校の設置基準」を緩和していますが、これは不自然な改正で、森友学園のためだったのではないかという疑いがあるのだといえます。大阪府では二〇一二年以前は、借り入れのある幼稚園法人の小学校設置は一切認められていませんでした。幼稚園を借金経営しているような法人には、より規模の大きい小学校は任せられないという趣旨なのです。しかし一二年四月、松井一郎知事の下、突然「借り入れありの幼稚園」にも小学校参入の門戸を開くのです。基準の改正は議会の可決も不要

一ヶ月間のパブリックコメントも「意見なし」で、公開からわずか二ヶ月であっ

さり改正が施行されています。「小学校の経営破綻を避けるために、入り口で財務審査を厳しくするならわかりますが、大阪府の基準緩和は理解に苦しみます」と専門家もコメントをしています。

大阪府によれば一二年の改正以降の約五年間で、小学校の設置申請をしたのは森友学園ただ一校で、これでは森友学園のために基準を緩和したようにも見えるのです。

維新の松井知事が安倍首相と協力をし、森友学園に対して便宜をはかった可能性は否定しきれないところのようです。これについてもしっかりした追及が必要です。

なお、元維新の衆院議員・上西小百合氏は「私が国会議員になった四年前、維新から『塚本幼稚園』を視察してその素晴らしさを広めると命じられました。行ったら異様だったので「卑怯」な私はブログにアップするのをやめました。森友学園問題は松井一郎・大阪府知事が認可した責任を取って終わるでしょうね。維新はいつもそんなもの。さすが自民党」とツイートしています。

上京するたび頻繁に日本維新の会代表・松井一郎・大阪府知事と前大阪市長・橋下徹氏は首相と会食を続けているようです。橋下氏はツイッターで政権の対応に苦言を呈していますが、この払い下げ時には維新の共同代表だったのです。

◆第二の森友学園があるってほんと？

実はもう一つ、森友学園と似た構図の

疑惑が安倍首相にもちあがっています。

昭恵夫人が名誉園長を務め、安倍首相が自分の親友が経営する学校法人のために規制緩和をして、結果この学校法人が経営する大学に約一千万平方メートル、開発費も含めると三六億円におよぶ土地がこの学校法人に無償譲渡される予定だということです。

この学校法人というのは、岡山県に本拠を置く**加計学園**グループです。岡山理科大のほか、倉敷芸術科学大、千葉科学大など岡山県内外の五つの大学をはじめ、六つの専門学校、さらには高校、中学、幼稚園、保育園までを擁する一大教育グループ。理事長の加計孝太郎氏は、安倍総理が若手議員の頃、一緒にアメリカ留学をした親友なのだということ。安倍首相とは幾度も会食やゴルフを共にしているそうです。また昭恵夫人も神戸市東灘区に**加計学園**が運営する「御影インターナショナルこども園」という認可外保育施設の「名誉園長」を務めているのです。

この加計学園が十年前から獣医学部の新設を申請してはねつけられていたのを、国は今年一月に今治市と広島県の国家戦略特区で、獣医師養成学部の新設を認める特例措置を告示し公募を開始。応募したのは加計学園のみ。この結果安倍首相が同学園を事業者として認可したのだということ。そして今治市はこれを受けて、市が所有する約一七万平方メートルを**加計学園に無償譲渡**することを決定したという事です。

国が認めてこなかった十年がまるで嘘

のように、安倍首相の決定によってあまりにも順調に進んでいった加計学園の新学期開設。そして安倍首相のオトモダチが経営する学園はその結果、三六億円の値段の土地をタダで手に入れたのです。この経緯を見ていると、一国の総理大臣が自分のオトモダチのために「規制緩和」をはかったとしか思えないのです。この件も森友学園問題とともに、さらに追及される必要があります。

◆マスコミが急に騒ぎ出したのは、何ぞなん？

二月二十日前まで、森友学園の問題は国会では取りあげられていたにもかかわらず、新聞・テレビなどのマスコミはほとんどこの問題を取りあげようとしませんでした。東京新聞が二月二十日に初めて大々的に取りあげて、ようやく他のマスコミも報道するようになったのです。この二月二十日以前には、金正男殺害事件やトランプ大統領のニュースによってこの森友学園の問題は国民の目から隠されてきました。とくにNHKの看板ニュース番組である「ニュースウォッチ9」では、連日にわたって金正男殺害事件を異様なほどの詳細にわたり一五分近くの時間を費やして伝えていました。これは森友学園問題が国会で取り上げられても続きましたので、この報道を避けようとする意図がはっきりと読み取れる態度でした。こういったやり方は、今やNHKニュースの常套手段となっています。国会で野党が政府を追及しても、**必ず安倍氏の言い訳を井で締めくくると**いう「印象

操作」をする。そして記事の見出しには政府側の主張にそった言葉が必ず選ばれているのです。NHKは以前TPPの場合でも、国会で野党が追及しても黒塗り資料しか出てこないのに「いまさら聞けないTPP」などと国民を愚弄するページを、ホームページに作って国民の目を逸らしていたのです。

二月二十日以降になり、民放各社がこの問題を取りあげるようになって、NHKも短時間取りあげるようになりました。たとえば安倍首相の「自分は関与していない」といったコメントを記事の見だしにしたり、安倍首相の国会答弁をそのまま流して終わりで、論評をしないといったように、ほとんど批判らしい批判をしていません。三月に入り、民放各局がこの問題を大々的に取りあげるようになって、ようやく本格的に扱うようになりましたが、それでも相変わらずテレビニュースでは、国会中継での安倍首相の答弁を延々と最後に流す、といった「印象操作」をしています。

安倍政権の下でのNHKニュースはそのまま信用がならない、ということ

読者の皆さんに知っておいていただきたいと思えます（独裁国の国営放送のニュースに対して、その国の国民は必ず信用をしていないといいますが、日本でもそのことが当てはまるようになっていきます。尚、言い添えますと、NHKはニュース番組以外では、まだ良心的な番組を作

る力をもっているようなので、ニュースなど報道番組は、特別に安倍政権からの圧力がとりわけ強く働いており、別に考えるのがいいと思います。

◆マスコミの大騒ぎの間に、その裏で大変なことが進行しているってほんと？

最近になって、北朝鮮の金正男氏の殺害事件や米国トランプ大統領のニュース、そして森友学園問題のニュースに隠れて今後の日本の社会を変えてしまうような重要事項が十分報道されないで、国民の知らぬ間に進行している、そんな事態に十分気づける必要があります（こういうのをショックドクトリンと言います）。一つは「共謀罪」の問題で、もう一つは「水道民営化」の問題です。

「共謀罪」

この森友学園問題の陰で、日本の将来を左右するとてもない法案が提出されようとしています。今国会に「共謀罪」を提出することにして、三月十日には閣議決定をする、というのです。これはその内容があまりに危険で、戦前日本の治安維持法に匹敵すると、過去三回も廃案になったもので、そのないようも、過去の法案と大きな違いがないことが指摘されています。

「共謀罪」については、これまでもこの記事で扱ってきましたが、「平成の治安維持法」とも呼ばれる、思想・言論弾圧にもつながらる悪法です。共謀罪の目的は日本を国家ぐるみ、戦前の日本社会、言ってみれば「大入用塚本幼稚園」にしてし

まうということにもなりません。「入りたくない！」と言うと、非国民・スパイ・テロリストと言われて牢屋で拷問される。日本の社会にそんな仕組みを作っていくことになるといえなくもない。塚本幼稚園は安倍政権の理想郷といえるかもしれません。

「水道民営化」

また政府は水道の民営化を推進し、その法案を提出しようとしています。水道などの重要なインフラは、国民の生命と健康のカナメであり、これを民営化すれば企業の利益優先となって、必ず料金値上げされることになってしまいます。海外では水道が民営化されアメリカの大企業が支配・運営することになり、水道料金が値上げされ「貧乏人は水を飲むな」とばかり、料金滞納者には容赦なく水道が止められてしまっているケースがいくつも報告されています。

水道など重要なインフラはもともと利益追求ではやっていけない性質のもので、利益追求ではなく、国民に安心して安定的に便宜を供給することが必要なものです。これこそが政治の大きな役割であるはずで、**主要インフラを民営化することは、政治の放棄であり、国民生活を破壊すること**に直結することであることを、認識していく必要があります。

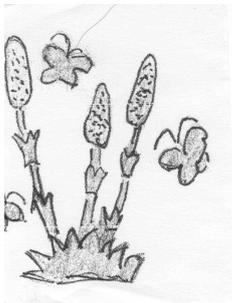
おわりに

これほどの大きなスキャンダルにまみれても、安倍首相は自民党の定期党大会で「党として憲法改正発議への議論を主

導していく」と述べ、自民党は総裁の任期を従来の「連続三期九年」に延長することを正式に決めたと報道されています。森友学園問題という疑惑が自分の妻と、ひいては自分自身の関わりも追及されているにもかかわらず、改憲への企みを加速するとは、つくづくこの人物の異様さが際立ちます。

このまま安倍政権の継続を許すなら、日本という国の破壊が進行し、デフレから抜け出せず、大企業はますます富む一方で、庶民の貧困化と格差・差別はますます進行してしまうこととなります。そして何よりも、共謀罪と改憲により、国民から言論の自由を奪い、この国を戦争する国へと向かわせ、言論弾圧と軍閥支配の戦前の日本へと限りなく近づけることになってしまいます。

今回の森友学園問題、そしてそれ以上に大きな問題である家計学園問題は、政権の腐敗ぶりをあぶり出す事件です。「アツキード事件」と名付けられるように、この問題はかつての「ロッキード事件」より大きな疑獄であると思われます。ここで野党が国会でしっかりと追及をして、安倍政権を倒さなければならぬのです。そのために我々も声を上げて行く必要があると思います。



素老人☆よもだ帳 (36)

坂本 一光

◆自分をみがく、自分らしい自分になる、あるいは、『てめえの面 磨きもせず 友達面する奴 大嫌い』について

年を取ると、あれは夢か現か、ふとわからなくなることがある。たとえば、もし私が校長なら、未来ある中学生に今のうちにこんな話をしておきたい、とそう思ったとする。すると、もう本当に話をしたような気になって来るから不思議だ。標記の主題「自分をみがく、自分らしい自分になる」についてもそうだ。てめえの面をみがきもせずに政治家面をする輩がわが国にも海の向こうにもいて握手などをしている。今の状況に腹を立てているうち、夢か現かわからなくなってきたが、校長の思いはふくらむばかりであった…。

なお、『てめえの面 磨きもせず 友達面する奴 大嫌い』は、その昔、長瀬剛が歌う『He・La・He・La』という歌の文句であった。以下は校長の話。

『皆さん、今日は、年度始めの始業式、一年を始める大事な節目の日です。今日、私が皆さんに話したいテーマは、「自分をみがく、自分らしい自分になる」ことについてです。

その前に、話しておくことがあります。新しい二年生の皆さんは、小学生のときと違って、この一年で心も身体もずいぶん大き

くなりました。もの見方や考え方も、広く、深くなった。これから、どんな二年生になろうとしていますか。それが問われています。三年生の皆さんは、そういう二年生を迎えました。どんな風に、この一年を過ごし、自分自身の未来を展望するか。そのための課題は何か、それが問われています。誰にとつても、今日は昨日の単なる続きなのではありません。他人から見れば小さくても、日々新たに、自分らしい飛躍をめざしたい。

次に、明日になれば、私たちは、新入生を迎えます。これからの一年間、みんなそろって元気に、たくさんのことを学びたいと思います。一人ひとりが、自分をみがくことを意識してください。自分らしい自分をめざしてください。

では、自分をみがく、自分らしい自分になるとは、どういうことか。その話に入ります。無責任な言い方をすれば、答えはありません。答えはないし、さらに言えば、「自分は、普通に、ちゃんとやっている」と、ほとんどの場合、私たちは誰でもそう思っています。今さら、何をみがいて、どんな自分になるんだ、と思うことだってある。しかし、そのとき、不意に誰かが横から口をはさんで、「お前は、一体、何てえ暮しをしているんだ」などと言ったら、私たちはどう思うでしょうか。今日は、そんな話を紹介します。皆さん、座って聞いてください。

皆さんはまだ生まれていない、一九八三（昭和五十八）年の一月から三月にかけて、『早春スケッチブック』というテレビの連続ドラマがあった。脚本は、山田太一という人が書いている。何を意図したドラマか。著者のメッセージを読みます。

『いつかは』とニーチェ（著者注・十九世紀後半を生きたドイツの哲学者）が言っています。「自分自身をもはや軽蔑することのできないような、最も軽蔑すべき人間の時代が来るだろう」と。実をいうと、そのニーチェの言葉が、このドラマの糸口でした。テレビを見ていらっしやる人々とそれほど違わない家族の生活を描き、それに罵声を浴びせかけるドラマ。これは、そんなドラマです』

三十年以上も前には、日本のテレビ界にそんな硬いテーマのドラマがまだあったと思ってください。ドラマの中に平凡な日々を送る一家があり、その家族の前に突然、この家族を脅かす一人の男が現われます（男を演じるのは俳優の山崎努）。彼は重い病気にかかっている、まもなく死ぬことを知っています。元カメランの彼の目は、病気のために随分悪くなっている。ときどき、突然の痛みが襲ってくるような状態ですが、医者にかかろうともしない。

さて、平凡な一家には、高校三年生になる息子がいます。この息子は、実は、この男の子でもあるという設定です。息子は、本当の父親は死んだと聞かされている。男は、死ぬ直前になって、名前も知らない息

子がいたことを思い出し、死ぬ前に息子に何かを伝えたいと考え、姿を現すのです。

ただし、男は（そんなことは、隠したつてすぐにわかってしまうのですが）、息子に自分が父親であるとは明言しません。また、男の口から出てくる言葉は、汚いというか、激しいというか、ほとんど罵声です。しかも、執拗で、長い。校長の話みたいです。そのつもりで、聞いてください。男のせりふの合間に、高校生の息子や母親などが短く口をはさみますが、それは省略。では、二、三の場面を、急いで紹介します。

◇『お前らは、骨の髄まで、ありきたりだ』

— 罵詈雑言の数々

【場面1】

「のむか？ ウイスキー」

「待てよ」

「いまなんとかいいたな？」

「ウイスキーを飲むか？ といったら、まだ、

といった」

「まだ高校生だから、ということか？」

「いやあー自分をおさえるってことはいいことだ。そうやって、少しずつなにかを諦めたり、我慢したりする訓練は、しなきゃいけない。そういうことをしねえと、人間、魂に力がこもらねえ。しよつ中、自分を甘やかして、好きなようにしてるんじや、肝心な時に、精神にあんた、力が入らねえ。なにかをドカンとやるのが出来ねえ」

「高校生だから酒をのみません、女房がいるから他の女とは寝ません、立小便はしません、満員電車では屁はたれませぬ」

「そんなことは、みんなくだらないことだ。」

守る値打ちはねえ。しかしな、そういう、小っちゃなこと、自分を押さえる訓練をしておくことは、絶対に必要だ。そういう訓練をしなかった奴は、肝心な時にも自分をおさえることが出来ねえ。これだけは、いっちゃあいけねえなんてことも、しゃべつちまう。しゃべらないまでも、顔に出ちまう。そういう、安っぽい人間になつちまう」

「毎日、自分を押さえる訓練をしなきゃいけない。自分をおさえる。我慢をする。すると、魂に力が貯えられてくる。映画が見たい。一本我慢する。二本我慢する。三本我慢する。四本目に、これだけは見ようと思う。見る。そりゃあんた、見る力がちがう。見たい映画全部見た奴とは、集中心力がちがう」

「そういう力を貯えなきゃいけない。好きなように、やりたいようにしてちゃあ、そういう力は、なくなつちまう」

「しかしだ。それにはあんた限度ってエものがある。見たい映画を三本我慢し四本我慢し六本七本八本我慢してるうちに、別に見たくなくなつちまう。なにが見たいんだか分らなくなつちまう。欲望が消えちまう。それじゃああんた、力を貯えることになりやあしねえ。力を、生命力を、むしろつぶしちまうことになる」

「我慢をしすぎて、力をつぶしちやあいけねえ。自分の中の、生きる力をな」（注1）

「生きるってことは、自分の中の、死んで行くものを、くいとめるってことだよ。気を許しゃあ、すぐ魂も死んで行く。筋肉もほろんで行く。脳髓もおとろえる。なにかを感じる力、人の不幸に涙を流す、なんてエネルギーおとろえちまう。それを、あの手この手をつかって、くいとめることよ。それが生きるってことよ」

【場面2】

「（立ち止まり）干乾しにする。俺なんざ、干乾しにしちまえッ（と怒鳴る）」

「（静かに）病気はなおしやあいいののか？ 長生きはすりやあするほどいいののか？」

「（一つ湯呑みを投げつけたあと）そうはいかねえ。身体が丈夫だって、長生きしたつて、なんにもならねえ奴はいくらでもいる。なにかを、誰かを深く愛することもなく、なんに対しても心からの関心を抱くことが出来ず、ただ飯をくらい、予定をこなし、習慣ばかりで一日をうめ、下らねえ自分を軽蔑することも出来ず、俺が生きててなにか悪い、とひらき直り、魂は一ワットの光もねえ。そんな奴が長生きしたつて、なんになる？ そんな奴が病気治したつて、なんになる？（急須をほうり、魔法瓶をほうる）」（注2）

【場面3】

「一体、お前らの暮しは、なんだ！」

「どうせ、どつかに勤めるか？」

「どうせ、たいした未来はないか？」

「バカいっちゃいけねえ。そんな風に見切りをつけちゃいけねえ」

「人間でものはな、もつと素晴らしいもんだ」

「自分に見切りをつけるな」

「人間は、給料の高を気にしたり、電車がすいて喜んでるだけの存在じゃあねえ」

「その気になりやあ、いくらでも深く、激しく、ひろく、やさしく、世界をゆり動かす力だつて持てるんだ」

「偉大という言葉が似合う人生だつてあるんだ」

「あんな親父と似た道を歩くな！」（義理の親父を演じたのは河原崎長一郎）

「親父に聞いてみる！ 心の底までひつさらうような物凄え感動をしたことがあるかって

な！」

「自分をみがくんだ。世界に向って、俺を重んじよ、といえるような人間になるんだ。家庭が幸せなら、事足りるなんていうようなあんな奴の（ように）」

「愛してるわけがねえ。ああいう男が、人を愛するなんてことが出来るわけがねえ。自分のことばかりよ。心の中のぞいたら、安っぽくて、簡単に、カラカラ音がしてるだろうぜ」

「適当に生きるなんてことを考えるな。体裁のいい仕事について、女房貰って、子供つって、平和ならいいなんて、下らねえ人生を送るな」

繰り返しします。これは、普通に、誠実に暮らしている人々に罵声を浴びせかけるという衝撃的なドラマでした。しかし、わ

がままで自分勝手な男が、間もなく死ぬとわかったとき、自分の息子に何かを伝えようとしているという仕掛けをして、生きるということとは一体どういうことなのかを、鋭く問いかけるドラマでもありました。少なくとも、私は、三十四歳のときに、これは初めて言いますが、なぜかまだ無職であるのに結婚していて、小学生と保育所に通う子どもがいたときに見たこのドラマの衝撃を覚えています。「一体、お前の暮しは何だ！」と、自分でもそう思った。それで、本箱をひっくり返して脚本（注3）を探し出し、ちよつと長くなりましたが、いま引用した部分を確かめました。もつとも、三十四歳のときの己の衝撃を中学生にしやべる校長もどうかしているといえは、ど

うかしている。どうかしていますが、こういう話はいま聞いておかないと、皆さんは二度と聞く機会を持たないかもしれない。そんなことを、勝手ですが、痛切に思つて紹介しました。

さて、どんな人でも物事でも、それが何であろうと、その内部には、いつでも肯定される一面と否定される反面があります。何人も、何事も、その中に矛盾や対立、葛藤を抱えている。そのことを分つたうえで、そのどこに共感し、どこに反発するか。私たちはそれを考えなければなりません。このドラマにしても、私たちは常に、何かに共感しつつ反発し、反発しつつ共感するというのが、本当のところなのかもしれませ

ん。意識して自分をみがく。自分らしい自分になる。この一年、それをめざしてくださいと言いました。しかし、それは、口で言うほど簡単にできることではない。この作業は、第一に、あるときは自分一人で行う孤独な作業になる。しかも、第二に、常に、自分の内と外にある矛盾や対立、葛藤にまみれた作業にもなる。それを覚悟したうえで、それでも私たちは、どうすれば自分をみがくことができるか、自分らしい自分になることができるかを考え続けたいと思います。てめえの面をみがきませずに友だち面をするわけにはいかないのです。今日の話は、これで終わります■（かたちは心であり、心はかたちになる）大分の素老人）

哲学屋の（ひんぎ）(32)

祖蔵 哲

天皇は世界一偉い

近代天皇制とは何かを哲学する。

去年七月、哲学関連の仲間とドイツへ旅行したのはこの新聞でも記事で連載した。その際のエピソードで気がかりなことがあった。それは仲間の一人がドイツ人に「日本の天皇は世界で一番尊敬されている。ローマ法王より偉い。その証拠に外国で招待があつた時には必ず日本の天皇が上席に座る順であると世界で決められている」というようなことを英語で説明してくれと私に頼んできた。これを聞いて大変驚いた。まず、彼はある程度教養があり歴史にも詳しい、海外の事情もわかっていると思う。その人がなぜこのような発言をするのかを考えざるを得なくなった。これはわれわれ日本人、特に近代の日本人の典型であると思われる。一般に、人は外国に旅した時にこそ、自分たちの国のことを再認識する。これは回りの人々が普段の自分たちと異なる他国にあり自分は何者であるか、どこに属するのであるかという、アイデンティティすなわち、自分が自分であるという根拠を求めるからである。人間は一人では生きられない。人間だけでなく、すべての生物、有機体は単独では生きられない。つまり独自で存在できない。単独で存在できるものは、鉛筆や机など無機物

だけである。人間は仲間、共同体、国家という順に自己アイデンティティを歴史的に拡大していった。今のところこの国民国家が最大のアイデンティティである。その歴史はそんなに古くはなく、十七世紀に宗教改革後の戦争の終結のためのウエストフリア条約から始まるという見方が多い。つまり、領土の画定、内政干渉への制約のためである。「講和」という話合いにより、国家という概念は国民の集合が領土を確保しそして主権、すなわち意思を持てるとした。「国家、国民、領土」は三位一体である。これらまさしく人間個人としても当てはまる、個人は家族に属し、家族は家をもつ、そして家計を営む意思を。そしてその個人は身体という領域をもち、意思することができ、そして他者から承認されている「個、身体、意志」「個、家族、生活」「個、共同体、国家」。これが近代社会アイデンティティの三位一体構造である。

さて、例の彼はドイツという異郷にあり、団体旅行ではないために更に日本人というアイデンティティを意識したのであろう。一般のパッケージ旅行では、どの国へ行こうと周囲はすべて日本人同士なのでこういう感情は起きない。もちろん私はその時、「そんなことを言うのはかえって失礼にあたるし、ましてここはドイツ、フランスと同じく王政を国民の意思で廃止した国、いうのはやめよう」と返した。この時はその天皇に対する評価の内容については言及しなかったが、日本に帰って、たまたま友人と話してい

て同じようなことを言っているのが驚いた。「天皇はローマ法王より偉い、万世一系なのは世界で誇るべきこと」という内容である。

「常識ある日本人」にはこの手の話ももうジョークか、昔話にしかなかった。しかし、こうも「うそ」が蔓延すると例の「オルタネティヴ・フアクト」つまり「代替の真実」になる。『国際的公式の席順は「在位の年数」によってその国がその時決める。』『万世一系は客観的学術的に完全に否定されている。』こんなのは常識中の常識であつたはずだ。それが国会でも議員が答弁に使つたりしており、国民は繰り返し聞かされると、それが本当であるかのように思つてしまつている。

なぜこのようになってしまつたのか。日本だけに限らず世界が内向きになり、自国のアイデンティティを再創作し、自信を取り戻すことを喚起している。この原因は、やはりグローバル経済とよばれる列強国が支配する世界経済体制の行き詰まりであるとする。日本を含む欧米列強国は資本主義の富の源泉である安価の労働力を求め世界をフロンティアとして拡大していった結果、アフリカの奥地まで到達し彼らに紛争の種を撒いて、それを刈り取ることはできずに最終フロンティアは消失した。もう後は架空空間しか拡大のフロンティアは残されていない。このような資本主義の限界はもう言い尽くされている。しかし、世界はその代替制度を見つけようとはせず、反対に自国に籠つてしまつている。問題は「グロー

バル、国際化」ではない。その支配が少数の国、少数の者、一部の階層によって行われていることである。

「天皇制」の話に戻ろう。最近、天皇の「生前退位」が話題になっていきます。まあ、この「生前退位」という言葉自体も異常な表現ですが、「退位」というのはもともと「生きていく」からできることで、「生前退位」といつてしまうと本人はもう死んでいるということになります。現在天皇は生きていくのに、もう死の直前にあると言つていくようなもので、天皇でなくても大変失礼だと思ひますが、多くのマスコミで使われ、皆も変に思わないような「異常な国」に日本はもうなつていくのでしょうか。特に天皇に対する言及に敏感な右翼の方々はこのように思つておられるのでしょうか。この「退位議論」でよく出てくるのは「男系継承」という問題です。女性が天皇になると「万世一系」が崩れると言ひます。反論者は推古天皇など女帝も過去あつたと主張します。しかし、それに対しては、女帝と女系は違うと言ひます。どうということかというとき、あくまで天皇家を継承するのは男系、つまり男子の家であるということです。ここには男性優位の思想が述べられます。そして最近では男性のY染色体のみが家系を引き継ぐものであるという科学的根拠も持ち出されてきます。こんな方法は現代の判定基準であつて昔からあるわけでもないのに、自分たちの主張に都合がよければ何でもありです。かわりに、都合の悪いものはすべて無視するのが彼

らの普通の態度です。

「天皇制」というのは「制度」のことでありませう。「制度」とは個人の意思が社会の意思として現れ承認された一形態です。「交通制度、ルール」は、皆が勝手に動けば混乱するから、一定の制限を個人にかけるというもので成り立っています。「制度」は個人の意思から出てくるものと社会から出てくるものが「一致」することにより成立します。つまり個人の意思を個人の集合である社会の意思がみ合うときに安定する状態です。しかし、歴史的な「制度」はそのような理想的な一致形態をなかなかとつていないのが現状です。歴史的な社会には階層が存在し、支配、被支配の構造が現存するからです。現在最良の制度と言われている民主主義はこの支配、被支配の構造を回避し、国家をより親個人的な共同体的社会に近づけるための方向に向けようとしています。しかし、支配の形態は目に見える権力から目に見えないパワーに変化し、また経済的、そして思想的な力へと巧妙に変化してきます。

「近代」と言うのは冒頭に書いたように「西欧発」の潮流です。そしてそれは「民主主義」とセットになりました。「民主主義」は「国民主権」が基本です。「主権」は「権利」はもちろんありますが忘れてはならないのが「義務」です。「納税」「勤労」「教育」は日本の三大義務です。「教育」は受けるほうなのでまあいいかなと思ひますが「勤労」や「納税」はできたらパスしたいと思ひますね。現にそ

れを實行している人もいます。日本では今のところ「義務」になっていませんが「兵役」というのも「戦前」にありました。近代以前の国家間の戦争は皆兵ではなく傭兵が主でした。いち早くフランス革命で民主主義化をしたナポレオンは瞬く間にヨーロッパを侵略しました。民主主義の力に国家が目覚めたのはこの時からです。

このように「近代」と「民主主義」は本来一体のものでした。そして迎える日本はどうか。長く続いた鎖国の江戸時代、近代化を終えた欧米列強の圧力に直面し、否応なく日本は社会体制を変更せざるを得なくなり得ます。生か死か、国民国家としての独立か植民地かの選択です。当然、国家としての選択をせざるを得ません。それは同時に西欧化を意味するのです。明治維新こそが日本における「近代化」＝「西欧化」の原点です。その時の思想、キーンワードは「王政復古」と「文明開化」そして「尊皇攘夷」の三つです。

「王政復古」は「天皇制回帰」のことです。先にも書いたように本来、近代、西欧化とは国家は「民主主義」であるべきものであったのです。しかし、長い間鎖国をし、しかもよく言われるように島国であり、隣国である、日本が手本としてきた中国は漢民族を中心に天からの権力の譲渡という東洋的支配構造により成立してきた国であるが、その国が脆くも西欧列強に屈した。手本であった中国の歴史に「民主主義」という事態は起こらなかったと同じく日本には起こるべくもな

い。武家政権からの権力移譲に、やむなく「天皇制」を古いタンスの中から引っ張りだしてきたのである。おそらく江戸時代の庶民は天皇が日本に生きていもるなんて考えたこともなかったであろう。さらに民主主義にとつて「士農工商」という階層も不要になる。つまり国民は等しく「天皇の子」である事が望まれたわけです。

さて、「文明開化」とは何か。これは当然「西欧化」のこととなります。当時の「西欧」とは「産業革命」「植民地主義」「キリスト教」のことです。西欧式機械産業の輸入、西欧式軍備の増強、そして宗教政策。この宗教政策でも「天皇制」が利用されました。

そもそも、今私たちが植え込まれている思想、天皇＝神道。これ自体、非常におかしな考えです。私達は学校では聖武天皇は奈良に大仏を造った。桓武天皇は奈良仏教を嫌って京都に遷都して平安京を造り、対抗して比叡山に延暦寺を設けたと習っています。代々の天皇は仏教崇拜であり出家者もかなりいます。どうしてこんな小学生でも知っている基本的なことが忘れ去られ、国会や社会で議論されるのが天皇は神道であることが疑問にならないのか。これこそは完全なる「刷り込み」の例です。恐ろしいですね。「天皇＝神道説」はやはり明治政府権力の西欧化、近代化の方便（一時的な回避）なのです。天皇制の根拠とされている「日本書紀」や「古事記」はそもそも、その時の権力が対外的、国内的にその正当性

を説明するための「神話」なのですから。明治政府は日本の近代化のためにはこのような「神話再生」の必要に迫られたという意思が働きました。なぜ、従来の仏教が国教にならなかったのか。まず一つにはキリスト教に対抗するための「一神教」という面が考えられます。仏教は多神教であり統合力が弱いという事も関係するでしょう。また、日本古来というオリジナリティも必要であったかもしれせん。しかし、天皇制としての神道は宗教といつても自然宗教であり、キリスト教のような啓示宗教ではないため行動規範になりにくい面があります。その規範の役割に儒教をもってきたわけです。ですから近代の天皇制の神道は明治期に西欧キリスト教に対抗するために、大急ぎで作られた「近代神道」なのです。安倍さんご贖頂の靖国神社もこの手の創作物です。

さて、現在も続いている日本のジレンマでありコンプレックスである言葉が、三つめのキーンワード「尊皇攘夷」です。「尊皇攘夷」とは、夷狄つまり外国人を排斥し天皇を拜むという、今ではすっかりアメリカのトランプ大統領の言葉になつてしまったような、「移民排斥、アメリカ第一」と同じです。そもそも「尊皇攘夷」は誰が言い出したのか、これも現在の政治構造と同じです。即ち、エスタブリッシュメント既得権者の対抗勢力の反発からです。将軍家の中の権力争いの結果なので、支配構造自体に変化はありません。これも現在のアメリカと同じです。しか

し、近代の日本では「尊皇」は成功しても「攘夷」は果たされませんでした。それは国力の差、軍事力の差でもあった訳です。これは「封印」されたのです。でもいつの日かそれは果たさなければならぬという「心の重荷」として、近代の日本はそれを背負ってきました。それが果たせると思ったのが、かの「大東亜戦争」でした。それが「太平洋戦争」となり夢と消えたとき、その重荷は「トラウマ」になったのです。

現在、政権が天皇を議論するとき「天皇個人」を対象にするのではなく、「制度」としての「天皇制」を言っています。しかし、奇妙なことに、そのような保守勢力に反対する論客は天皇個人の行動や言動を大義にしています。つまり、平和を求める現行憲法を守る天皇は素晴らしいと。よく考えてみると、現行の天皇家、皇室が存続しているのは現行憲法のおかげなのです。ですから現天皇が現行憲法を尊重するのは自然なことです。保守政権は現行憲法を連合軍の押し付けであるといいますが、戦争での勝者は当然の権力を得ているわけです。そこまでの戦争は日本の無謀、無策であったのは誰もが知ることです。そして、連合国つまり、西欧の価値観は当然近代の日本とは異なっているのです。「民主主義」と「天皇制」は根本的に異なる世界観です。現行憲法の最初の条文が国民ではなく天皇から始まる自体が今なお「近代のジレンマ」を抱えたままの日本です。

「天皇は世界で一番偉い」「皇室は世界

大峯奥駆道(9)

梵店主

最古の家系で万世一系だ」という時の日本人は「周回遅れの近代のジレンマ」と「トラウマ」の現れである。前者は「文明開化」「尊皇攘夷」そして後者はどうしても忘れない、消したい「敗戦」の事実です。なぜこのような「劣等感」の裏返しと見られるような「対抗意識」を持つのか。しかし、これは現在、日本でだけではない、先に述べたようにアメリカでもそうであるし、欧州でも同じ世界の潮流になってきています。この原因は何か。これも哲学的に考える必要があります。

近代の人間を「自己意識」の「承認」として大著「精神現象学」において捉えたドイツの哲学者ヘーゲルにヒントが隠されているようです。二〇〇年前に現代を言い当てている。それはヘーゲルの時代が世界の近代の始まりだったからです。今回は迷走する現代世界をヘーゲル哲学から説明してみましよう。



摩耶山の天狗尾根を登り始めて、よっちゃん、思っていたより早く歩けることに気づいた。気持ちはバテかけているのだが、足は動くのである。意外な身体の強さを不思議に思いながら登った。ゆっくりだが休まず歩き続けて尾根の中ほどまで登って市ヶ原で買ったペットボトルの水を飲んだ。

もう、あたりに参加者の姿はない。みんな先に行ってしまったようだ。熊さんに励まされヒーヒーと言いながら歩き続け摩耶山の展望台に着いた。二時を過ぎていたが、登れたことによっちゃんを感じていた。やはり毎日歩き続けてきたおかげで足腰が回復し歩けるようになったのだと思った。やはり練習は裏切らない。少々体調が悪くても練習で鍛えてきた身体は普段通りに動くのだ。摩耶山で少し休憩していたら雪が降ってきた。六甲山の西側は比較的暖かく、東六甲になると雪が残っていたりする。それだけ寒さが変わるのである。

摩耶山から宝塚までは、たいした登りの山はない。いくつかの登りはあるが何とかなるだろうと思っていたが簡単ではなかった。小雪から吹雪になり道が白くなりだした。足腰も疲れてきてちよっとした登りもしんどい。三〇キロを歩いて

来ているのだから無理はない。

六甲山全山縦走をした人の手記を読むと、マラソンで四十二キロ走るより苦しい。また、富士山を二回登るぐらいだと言っている人もいる。確かに五十六キロの山を登ったり下ったりしながら歩くのは大変だ。よっちゃんは、大会の趣旨にある心身の鍛錬が気に入っている。競争するのではない、おのれ心を鍛えるのである。ひ弱になった心を鍛えなおすのだと意気込んでいるが現実には厳しい。

神戸自然の家を過ぎたところから急な階段が始まった。もう足がすりそうになつてくる。一歩一歩が非常につらい。そこを何とか登りきると少し楽な道になる。ドライブウェイの脇を歩き六甲山小学校の近くを歩きゴルフ場の中につくられた金網のフェンス越しの道をいく。このあたりになると道に雪がある。うつつらと雪がたまっていた。

もうすぐ六甲最高峰にちがいないと思いつつ必死に歩く。風と雪が容赦なく吹いて来て顔と手が冷たい。もう余裕がないのでドライブウェイを歩くことにした。山道をおろく体力が残っていない。どうにかして最後のチェックポイントに着かなければという想いだけで歩く。やっとこさチェックポイントに着いた。制限時間内であった。ボランティアの人から暖かい飲みものをもらい休憩する。

さあ、これから宝塚まで最後の一四キロの山道を下っていく。途中には山小屋も

なく逃げ道もない。引き返しが出来ない長い道だ。よっちゃんは初めてなのでよくわからなかった。登りが無い楽な下りだと思っていた。五時をまわり夕闇が迫って来ていた。携帯のラテを取り出して灯がつくか試験する。もし、つかなければ途中棄権して有馬温泉へ下りなければいけない。有馬へは二時間あまりで着く。残っていた幾人かの参加者も足早に下っていく。熊さんと二人だけの夜の山行になった。もし、よっちゃんが独りだつたらとても行く気はしなかったにちがいない。歩き始めてすぐに暗くなり知らない夜の山道をおろく。

下りは楽だと勝手に決め込んでいたよっちゃんだったが、歩き疲れていたために膝がオイルの切れた機械のようにスムーズに動かない感じになってきた。なんでもない下りなのだが歩けない。後ろ向きに歩きたい感じで、膝がガクガクになり歩くピッチが上がらずヨチヨチ歩かか二のように横歩きしたい気分だ。時間だけはほとんど過ぎていく。三時間もあれば楽に下りられるコースなのだが途方もなく遠いコースになってしまった。ときおり雪交じりの風が林間を吹き抜ける。宝塚の灯はなかなか見えてこない。九時半の制限時間に間に合うだろうか。

本屋さんで遊びましょ…の巻

文章には「」や「」があるが、私の場合、本屋に行くことはこの句読点に似ている。日曜日に食料や日用品を買いに行ったら、本屋に寄る。出張の帰り、必ず本屋に寄る。締め切りの作業が終わったら、いそいそと本屋に行く。日常生活の、小さな節目節目に必ず行くのが本屋なのだ。

本屋ぐらい、行きたかったら毎日、行けよ!と思う人は、阿波座に住んだことがない人だ。阿波座には本屋がない。実は一軒できたのだが、町の小さな本屋さんで本の数が圧倒的に少ないのと「買わないで出る」勇気がないので、入れない。私のいう本屋、日常の句読点というべき本屋は紀伊國屋、旭屋、ジュンク堂、ブックファースト等々。「立ち読みが自由にできて、買わなくてもとっとと出て行ける店」である。

句読点とか大げさに言っちゃって、要は立ち読みがしたいわけね…と思ったアナタ、言うておくが、私、本は買う人だ。その証拠に、狭い家の中、わけのわからない本で溢れている。ほとんどが読み物(信長本を含む。ミステリが多い)。あと心身の健康関連本。いくら読んでも、賢くも勉強にもならない、娯楽系一筋(健康本の中身はすぐに忘れる)。それでも、

行くたびに、何か買う。もちろん読みたくて買うのだが、同時にストレスを発散してもいるのだろう。男の人はどうか知らないが、女の人は自分が気に入ったモノを買うと、満たされた気分になる(よくな気がする)。その昔、農耕生活が始まる前の長い長い期間、貝を拾ったり、木の実を採ったりして暮らしていたころの名残だろうか。「わくわく、今日はこんなに貝が獲れた! やったね、ワタシ!」みたいな。違うか?

ストレスを発散するなら本なんかよりもっと高価で、きらびやかなモノ、たとえばブランド物の服やバッグ、宝石なんかがよさげだが、所詮、私に買えるわけもなく、無理して一個買ったところで似合いもしない(悲しい)。

ストレスがたまるほど仕事をしているといえるのだろうか?という別の疑問も湧くが、それは今度ゆっくり考えることにして、本屋である。

我がワンダーランド、町の大型の本屋さん。読んだことのない本が溢れ、カラーグラビアの少々お高い本を手にとってペラペラ見て、棚に戻してもイヤな顔ひとつとされない。「本は買う人である」と豪語している割に、やっぱり高い本は棚に戻しているやねと突つ込まないでいたきたい。ほとんど毎回買うけど、せいぜい一、二冊。手に取った本のほとんどは棚に戻しているのである。それでも、本屋さんにとって私は上得意ではないの

だろうか。むろん、医学書などの専門書を何冊も買う人には負けるが、こんなにしよつちゅう行っているのだから。

そんな上得意の私を本屋さんがだますなんて…。まあ聞いて下さい。

本屋に行く人は知っていると思うけど、最近、本屋では「書店員のおすすめ」というPOP(ポップ、つまり広告文ですね)が棚のあちらこちらに貼られていたり、その本の上に小さな旗みたいになっていたりする。「この本、私も読んでみですけど、すごく面白かった。今年のベストワン、早くも決まっちゃいました!」みたいに、親しげに話しかけてくる感じなので、「へえ、そうなん?」とつい、耳を(この場合は目だけけど)貸してしまう。このときもそうだった。

「こんな本読んだことがない!」と少し大き目の文字で書かれてこう続く。「いやもう…突然自失とはこのことですよ…ほんとに。世に『どんでん返し』と銘打ったミステリはごまんとあります。原文をそのまま書くと、長くなるので意識すると、書店員は大体、どんでん返しの予想がつくのだそうで、それでも話を盛って「これはすごい!」とか「驚愕必死(必死の死の字が間違っていると思うが、ミステリの世界の話だから…)。とにかく、原文のママである」とか書くのだそうだが、このおすすめ本は本先に先が読めなくて、「どんでん返しのエッジが効きすぎ! (原文ママ)」なのだという。「あつ

という間に世界が反転します」そこでじゆうぶんに驚かされたと思っていたら、まだその先に衝撃の事実が…。

このPOPはまだ続いて、「ここまで読んだ人は自分は引つかからないぞ、動じないぞと思って(本を)読むだろうけど、そういう人ほど『あつ!』と叫ばずにはいられないはずですよ!」

もちろん、私、買いました。「この闇と光」というタイトルで、書店員さんのPOP通り、いやPOP以上に面白くて、楽しめて、どんでん返しに「えええええつ」と叫んだりもした。

だったら、全然、だまされてなんかいないじゃないか?と思うでしょ。ところが、だまされていたのである。

私は本の面白さにハマリ、もしあのPOPがなかったら、この本を読むことはなかっただろうと思ひ、生まれて初めて、書店員さんにお礼の手紙を書くことまで考えた。作家が服部まゆみという人で、本屋好きだけと聞いたことのない名前(裏作で、既に亡くなっている)で、本を手取る確率はほとんどゼロだった…と思ったからだ。

「POPを書いてくれた書店員さん、ありがとうございました。出会えるはずのなかった『この闇と光』の世界に導いてもらえて、本当によかった」と本気で書こうと思っていた。宛て先は「旭屋難波店・書店員様」。「お名前も存じませんが」と書きだそう。

そんなことを考えながらも、ほかの本屋にも立ち寄るのが「本屋好き」の習性。同じ難波にあるブックファーストに入ったら、なんとまったく同じPOPが。手書きのへたくそな字（失礼！）も強調のラインもみんな同じ。旭屋のPOPをブックファーストが真似たわけではなくて、同じもの。つまり、書店員さんが書いたのではなく、これは出版社がつくったもの（手書きを印刷したもの）だった、というわけ。

「だまされた！」

もちろん、お札の手紙を書くのはやめた。というより、「書く前に、気がついてよかつた。恥をかいてしまうとこらだった」と胸をなでおろし、「書店員さんのPOP」という手口で、本を売ろうとする姑息な出版社の手口も立ったが、それでも「この闇と光」は面白かつた。

ファンタジーのような、誘拐事件のような、ホモ小説のような、とにかく「どんでん返し」が二度、三度。いやはや！何回か読み直して堪能した後、本好きの友だちに貸したら、酷評とともに返ってきた。「途中で読むのがイヤになった。どこが面白いのん。漫画のストーリーにありそうやん」。私は再び、叫んだ。「ええええええええつ」。

(A O)

孫ウオッチング (15)

福田 圭

いよいよ光ちゃんが自分の足だけで立った！片手をつないで歩くことができる。直立二足歩行をする人類の仲間入りをしたのだ。二か月前にはできなかったのに、ついに飛躍の時がきた。大雪のせいで先月は会えなかつたため、二か月ぶりとなる生後一七ヶ月目の「孫ウオッチング」で初めて確認することができた。階段の上り下りも一人でできるという。

言葉の獲得も始まり、ご飯のことを「マシマ」とか、ジュースのことを「ジュー」とか言つて要求するようになったという。「いくつ」というと、人差し指を一本立てて答えるという。お父さんやお母さんとは会話になつていくというけれど、おじいちゃんに対しては、まだ人見知りをして、警戒感もあるのか、お話をしてくれない。ひよつとするとお父さんやお母さんとはコミュニケーションができるけれど、知らない人とはコミュニケーションができないのだろうか？ ようやく帰るときに、「バイバイ」と手を振ると、「バイバイ」と手を振り返してくれた。おじいちゃんとコミュニケーションができるようになるには、もっと「慣れ」が必要なのかもしれない。光君とたくさん会話ができる日が来るのが楽しみだ。

一歳半前後というのは大きな飛躍が現れる時期なのだ。

大人の今昔物語 (31)

石川 吾郎

今回は、名人は名人を知るといった趣きのある話です。教科書に出ない度は、一／五。

藤原保昌と大盗賊・袴垂（今昔物語巻一 五・七）

今は昔、世に知れた袴垂という盗賊の大親分がいた。勇敢で力は強く、足は速く、腕が立ち、智慧が深く、天下無双の強者だつた。あらゆる人の物を、隙を見て奪い取るのを生業（なまのい）としていた。

十月（初冬）のころ、着る物が必要になつたので、衣をゲットしようと思ほしい所に目をつけ物色していると、ある晩夜更けて世の中が寝静まつたころ。有明けの月がぼんやりと出ているところ、都の大路をゆつたりと歩く者がいる。指貫（さしぬき）と見える袴のすそを帯に挟み、絹のしなやかな狩衣と見える衣を着て、ただ一人笛を吹いている。

袴垂、これを見て「やった、これこそワシにうつつつけの奴だ」と、喜んで走り寄り、打ち伏せて着物をはがしてやろうと思つたが、どういふ訳か、この男に對して恐怖感が湧いてきて、二三町ばかり後をつけていくと、この人、誰かに狙われている、と気づいたようすもなく、一層落ち着いた佇まいで笛を吹いていくので、「今だ」と袴垂、足音高く走り寄つ

たが、保昌、少しも慌てた様子もなく、笛を吹きながら振り返るさまは襲いかかる隙もなく、袴垂はそのまま走り去つた。このように何度か、あれこれと試みたが、保昌は少しもひるんで騒ぐ様子もないので、「これはただ者ではないぞ」と、袴垂はそのまま十町ばかり後を付けていった。「といつてこのままでは済ませない」と、袴垂、刀を抜いて走り襲いかかろうとすると、保昌は笛を吹き止めて「お前は何者だ」と問う。

たとえどんな鬼や神であつても、このようにただ一人である人に襲いかかるのは、さほど恐れることはないはずなのに、どうしたことか、今の袴垂はすっかり意気阻喪して、ただ死ぬほどの恐怖を感じたので、我知らず跪いてしまつた。

保昌「お前は何者だ」と重ねて問うと、今は逃げようとしても逃げられまいと観念した袴垂、「引き剥ぎてください。袴垂と申します」と答える。保昌「そのような者が世にはいるとは聞いています。後に付いてこい」と言い、また前のように笛を吹いて歩き始める。

この保昌の佇まいを見て「ただの人間ではない」と感じ、鬼神に魂を抜き取られたようでありさまで、袴垂は後に従っていく。

保昌は大きな屋敷の門に入った。沓（くつ）を履いたまま、縁に上がったので、袴垂「この屋敷の主人なのだ」と思っているうちに、保昌は奥に入つてすぐにまた出てきた。綿の入つた厚い衣を手にして、それを袴垂に与えた。「これから、このような必要があれば、ここにきて言え。素性も

知らぬ人々を襲って、お前ケガをするなよ」と言い残し、奥に入ってしまった。

その後袴垂、この家を調べると、摂津の前司・藤原保昌という家のであった。「あの人が名高い、あの保昌だったのだ」と思っていると、生きた心地もなかった。この話しは、袴垂が捕らえられて語ったことだが「すさまじく恐ろしい人だった」ということだ。

この保昌の朝臣は、代々の武人というわけではなく、藤原致忠という人の子である。しかし武家の出の者たちにならず、剛胆で、力強く、武勇に優れ、智慧も優れていたので、朝廷もこの人を武芸の方面で仕えさせたが、非の打ち所がなかった。それで世の人は皆この人に一目置いたものだ。ただし、この人の子孫が榮えず武人が排出しなかったのは、兵の家でなかったからだっただろうかと、人々が言い合ったことだそう。

《コメント》

藤原保昌の有名な伝説です。保昌は女流歌人の和泉式部の夫としても有名で、和泉式部に御所の紫宸殿の梅を手折って欲しいと請われ、警護の北面武士に弓を射掛けられたが、なんとか一枝を得て愛を射止めたという逸話があり、これは京都の祇園祭の保昌山のテーマとして取りあげられて、人形で再現されているということです。

またここで登場する盗賊の首領・袴垂も、当時の都では有名な盗賊だったらしく、「今昔物語」でもいくつかの説話に登場しています。

B級サラリーマン渡世譚(44)

明石 幸次郎

明石が輸出部に赴任したのは昨日で、その数日前に、韓国の技術提携先のD工業の製造本部長鄭常務から輸出本部を飛び越えて、直接、宇都宮工場の工場長に納期の督促と短納期の強い要請があった。

交渉の経緯が分からない工場長は、相手が流暢な日本語で、CKD部品が入らなかったら、製品が組み立てられなくなり、注文を貰っている客先からどんな激しい苦情が来るかもわからない、場合に依っては政府に抗議に行くかもしれないと切羽詰まった韓国側の状況を伝えられ、何としても八月からの組み立て工程に間に合わせて欲しいと、懇願された。

それに対し、工場長は、相手も同じ立場の製造責任者というポストに同情と共感を示し「それは大変ですな。輸出部に事情を調べさせて工場として最大限の協力は致します」と答えたのであった。

その後、工場長は工務課のH課長に鄭さんの電話の話を伝え、直ぐに事情を調べ、CKD部品の手配をするように伝えるところ、H課長は毎年、この時期が来ると、韓国側と輸出部は、ごたごたするので、必要なCKD部品リストは事前に輸出部より提出させて、先日、納期が掛かる部品は内示を掛けて手配をしていますと答えたという事であった。

このように、H課長の先を読む機転で、

事態は展開し前に進んでいたが、韓国の鄭常務は、工場長に電話した後、旧知のS輸出本部長に電話して、「宇都宮工場長に電話して納期を合わせて協力して貰ったが、自分たちの窓口であるお宅のM居が全然協力をしてくれないと言うことは、どういうことか！CKD部品が遅れば、我々の組み立てが遅れ、販売が大幅に低下し、取り返しがつかない事態になるかも知れない、これを何度も伝えてあるのに、何ら具体的な事情が伝わって来ないのか、どういうことか？我々をバカにしているのか！このような、担当は交代させてほしい」と、エライ剣幕で一方的に抗議をして来た。

韓国側のある意味では、一方的な話で、韓国の担当であったM居は、韓国側と上手く交渉が出来ていなく、結果として相手方のトップを怒らせたということになったこと、交代させようということになった。

丁度、その時に、転勤で工場から来た明石なら工場経験もあり、語学力はなくても、韓国ならば、何とか、M居に替って、やってくれるのでは、ということ、昨日、韓国の担当になったばかりであった。

明石は、納期促進の会議が終わったので、集まってくれた、一人ひとりに声を掛けて、協力して仕事を進めてくれるお礼を言った。

特にキーマンである資材のM本にも頭

を下げた。紐の緩んだようなM本の顔を見ると、どこかで会ったような気がしたので、思い切って「M本さん、どこかでお会いしてませんか？」と尋ねたら「アಂತと同期生やないか！俺は、技術系やが、正式配属を人事部から通知される時、工場の資材に配属されるとなった時、同期の皆に、可哀想やとか、アホやと言われ同情されたり、バカにされたがな」。

アంతは本社資材部に配属されて、偉そうにしてたやないか？ハツハツハー」と調子の抜けた声で意外な事を言われた。「そうか、同期か！M本、お前か？新入社員の実習の時、俺の友達のHと毎晩飲みに行ってた、あのM本か？お前も宇都宮の資材で貫録がついたなあ？処で、お前は、今まで話をしたことはなかったが、俺は、そんなに本社の資材部で偉そうにしてたか？」と聞いたら、「工場からみたら、本社という処は、敷居が高く、お前のような奴でも賢く、偉そうに見えるのやーワツハツハー」と黄色い歯を見せて笑った。「M本よ、そう言われたら、俺は、本社から転勤して堺の資材に行った時、本社から来たと言うだけで、苛められたわ。転勤の挨拶にT生産管理課長の所に行って、本社から来て工場の事は何も知りませんので、宜しくお願いします、と言ったら、Tさんが、何も工場の事は分からん、それは、どういう事や、知らん奴は本社に帰れと、顔を真っ赤にして怒られたわ。このおっさん、挨拶し

てるのに帰れとは何や！辞令を貰って来てるのに、本社には戻られませんかと言いつたら、勝手にしとけ！と又、怒鳴られたわ。あれは、本社から来た人に対する、苛めやな」と2年前を思い出して言つたら「明石、お前、挨拶の言葉を知らん奴やなあそんな時は、工場は初めての経験ですので、これから、一生懸命、工場の仕事を勉強して一日でも早く、前任の人に追いつく様に努力しますので、ご指導宜しくお願いしますと言えば、Tさんもそうか、分かった、君も工場で頑張れよと言つてくれたと思うぜ！」

「そうか？相手に対する言い方か？」
「そうや、気持ちと同じでも言い方が違えば、それを聞く相手にすれば、受け止め方が違ってくるぞ、言葉は難しいのう。これでも、ワシも仕事と女には苦労してるんやぞ！」

「そうか！言葉使いなあ。お前、仕事は苦労していることは分かるが、後の女に苦労していると言うのはどういう意味や！」と聞き返すと、二人の会話を聞くとはなしで聞いていたK定さんが「ワツハツハ。明石さん、同期やつたら、このまっちゃんに助言してやってよ。頼むわー。何年前から何回も見合いましたり、飲み屋で知り合った女の子ともエエところまで行くんやが、結果が出てないんやで。仕事は熱心やし、取引先からも信頼は厚いんやけど、女には、全然、縁がな

いやわ。何とかならんかなあ〜」

明石は、同期と分かった気安さから「M本、お前、女の子と会う前は、そのぼさぼさ頭と、自慢の黄色い歯を、特に笑つたら見える前歯を何とかしたらどうや？お前が言う言葉使いもそうやが、見た目の印象も大事やで！俺もこの顔で偉そうなことは言えんが、髪の毛を整えて、歯を磨き、アイロンの掛かった襟にシミがついていないYシャツを着て、紐が緩んだ顔を少し引き締めて、女の子と会えば、絶対に上手く行くと思うぞ。君は性格が良さそうやから、後は、外見だけや、問題はなあ〜」と言つて同席していた他の人も話題に入つて来て「M本、俺もそう思っていたんやが、アンタが気を悪くすると思つて言わなかっただけや！特に前歯はなあ〜アンタが生まれて一度も歯を磨いたことが無いが、虫歯は一本もないと、黄色い前歯を出して自慢していたから、歯の事を言うのは、悪いと思つてたんよ。同期の明石さんは、流石に良く言つてくれた」といつの間にか仕事の話から、話題は明石とM本を囲んでM本の見合い話に花が咲いた。

如何にM本が工場で皆から興味を持たれ、愛されているか知つて、宇都宮工場の暖かそうな人間関係の一端を感じて、これからも、こういう人達と仕事をして行けるのかと思うと、しんどい仕事も楽しくなるだろうと思つて来て、M本の緩んだ顔を見て、笑いかけた。

オクラの山たより(6)

困子生

「枕草子」や「源氏物語」ではつかみにくい当時の庶民の姿も説話物語、たとえば「今昔物語」には多く見ることが出来る。御存知のように「今昔物語」は院政期、たぶん一一二〇年前後に成立したとみられ、近年では南都北嶺(奈良や比叡山)の僧侶が編纂したものかという説がある。そのため全三十一巻のうち三分の二が仏教説話(仏教の教えを説く話)で残りが世俗説話(仏教的な色彩のない話)である。筆者が特におもしろいと感じるのは全編「鬼」の話の連続という第二十七巻、そして「盗賊の悪行」の話が満載という第二十九巻であるが、今回はそこからはなく第二十六巻から一つ紹介したい。最初にお断りするが、文学的な匂いはまずなく、題名の「東ノ小サキ女、犬ト昨ヒ合ヒテ互ニ死ニタル語」(巻二十六―二十)から想像できるようにな殺伐とした話である。ざっとあらすじを述べれば次のようである。

今は昔、ある東国の有力者に仕える十二、三歳ぐらゐの女童めわらわがいた。隣の人が白い犬が飼っていたが、どういうことか、この女童をみるといつも敵のように食いかかってきた。女童もこの犬を見ると打とうとしたので人々は怪しいことだと思つていたところ、この女童が流行病はやりやまい

にかかり重病となった。主人は死の穢を恐れ「外ニ出サム(門前を出して臥さしめようとした)」とした。そのとき女童がいうには「人もいない所に重き病となつて臥したならば(犬に)きつと殺されてしまいますので、犬の知らない所に出してください」と。主人は「もつともだ」と思い、食物を十分に持たせて遠い所に出した。「これで大丈夫」と主人は思ったが、女童が主人の家を出た翌日、隣の家の犬の姿も消えた。不審に思つた主人が女童の出したところに行つてみると、女童と犬とが互いに相手を食い殺していた。最後にある作者の言葉は「此ノ世ノミノ敵ニハ非ザリケルカトゾト人皆怪シビケル(この女童と犬とは、此の世だけのかたきではなかつたのだと人々は皆不思議がった)」とある。もちろん、この説話の内容は前世からの仇敵どうしが現世でも食い殺し合つて死ぬほどのことになつたという話だろうが、筆者はここで僧侶の説教のような話をしようというのではない。「病者」となり外に放り出された「女童」について少し考えてみたいのである。

さて、重い病を得た病者や孤児はそれ自身では生存が困難な社会的弱者であることは今も昔も変わりはない。したがつて、彼らは平安京でも、いま述べてきた東国の田舎でもしばしば犬の餌食になつてきた。先ほどの「今昔物語」の話では「女童」には両親はいないようであり、話の当初からすでに孤児である。おそら

く下働きなどの雑用をする下人であったろう。そして、流行病にかかり病気が重くなると「死の穢」を恐れた主人から外に出された。このような主人の行動は当時としては当然なものであり、『今昔物語』の作者、つまり平安時代後期の知識人もこの東国の主人に対して非難めいた言葉を何も発していない。古代から中世においては死者や病者は野外に棄て去る。それが当時の常識であった。中世史家の勝田至氏は古代から中世では血縁のない死者は山野や河原に遺棄され、また都市・農村の下層では特定の地域に風葬していたとし、さらには病者の遺棄が古代から広範に存在していると指摘している。

家の外に遺棄された病者の例を他にもいくつか出してみよう。ただし、地方の史料は少ないので話を平安京に限ることにする。

「穢」を避けるために路頭に遺棄された多くの病者は尿尿のために臭穢不浄となり人々は鼻を塞ぎ目を閉じて通り過ぎていた（『法華経記』中六六）。また、主人が宮仕えの「知ル人毛無キ」死にそうな宮仕えの女を「仮屋」をつくって出したが、まもなく死んでいる（『今昔物語』二七一―一六）。さらに、次の例は「本朝世紀」の天慶五年五月四日の条にある記事である。

その日、天は陰り雨が降っていた。内裏の中ではちよつとした騒ぎが生じた。「穢」のため公卿たちの会議が開けなく

なつたのである。「穢」の事情を尋ねさせると次のようであった。その日の朝早く朱雀天皇の乳母の橘光子が居住している左近衛府の曹司（宮中にある女官など）の宿所・部屋で三、四頭の犬が死んだ十歳くらいの子を食べているのを下女が見つけた。その子は胸の上と頭を残すだけとなつており、すでに手足はなかった。その女の子は左近衛府の厨家（食事の用意をするところ）で召し使われていた下女の子供であり、その下女は病気のため「出し遣わされて」しばらくして死んだ。しかし、その女の子が「依止するところ（頼つていける家や人）」がないので、厨家の周辺を去らず、毎日、物を乞ひに来ていた。ところが、今度はこの女の子が日に日に憔悴し死相が見えたので外に追い出した。追い出された後、その子は左近衛府のすぐ北にある内教坊（宮中における音楽関係の伝習所）の南門にとどまっていたが、夜中にこちらに戻ってきて「死に臥し」て、その後、犬に食われたと左近衛府の下人はいう。厨家の下女は子連れの住み込みというかたちで働いていた。貧しい下女には貴族層のように乳母を雇う経済的な余裕などはない。当時、庶民クラスの夫婦は共稼ぎが普通であり、子供は母親が連れて出勤した。この話には女の子の父親は登場しない。たぶん下女は独力で子育てをせねばならなかつたろう。しかし、病ともな

れば子供もろとも外に放り出す。これがこの時代の常識であった。「穢」の事態が判明した後、公卿たちがケンケンガクガクの議論を展開したと記録されている。議題となつたのは不幸な女の子の悲惨な死などのことではなく「穢」がどこまで及び何日間の謹慎が必要かということであった。

両親がなく重病になつたために外に出された東国の女童、死にそうになつたが「知ル人毛無」いで外に遺棄された「宮仕えの女」、母である下女が外に遺棄され同時に路頭に放り出され衰弱死して犬に食われた女童。彼らは同じ家の中に入りにしていても、自分の死によつて家を「穢」とすることが許されない人々であった。また、現代の私たちが普通に考えている家族の形を持たない「孤住（一人で住む人々）」に等しい人々であった。こうした人々は病気などによつて簡単に京中の路頭の病者となつたのである。

容易に路頭の病者となることは何も下層の人々だけのことであつたのではない。たとえば、次のような話が『今昔物語』（巻三十一―三十）にある。

尾張守の一族で歌人でもあつた尼が病気で意識も確かでないようなので、その兄は「家ニテハ殺サジ（この家では死なせたくなぬ）」と家から出してしまった。尼は清水寺あたりの昔の友達を頼つたが、そこでも「此コニテハ否不殺（ここでは

死んでいただけません）」と拒否され、ついに当時の死体の遺棄場所であつた鳥部野に行き畳を一枚敷き墓の影に隠れて臥した。尼の従者はそれを見届けるとその場から去つたという。貴族の一族といえども家の主人の許可がなくては家の中で死ぬことはかなわず、たやすく家の外へと放り出され大路小路に遺棄された人間として路頭をさまようこととなつたのである。

ところで、こうして「孤住」の話などをあれこれと書いてくると現代日本で多く起きていた孤独死のことを思い浮かべてしまう。既に老人と人から呼ばれるのも間近な私には人ごとではないような気分になつてくるのだが、今少し話を続ける。すでに一部は述べているのだが捨子と孤児、そして、その運命についてである。

捨子の話は説話に数多くある。その原因にもとづいて分類すれば、第一に異常な出産、第二に継子などの家族関係の軋轢から生じたもの、第三に貧困のために養育が不可能な場合、といったことになるだろう。そして、特に多いのは第三の貧困による捨子であり、さらには説話で見る限り捨子の多くは生後直後に遺棄されていると専門家は指摘する。

「貧シキ」女房が去年と今年とあいついで出産したが乳母もとれず父親である男性が地方へ下ろうというので赤子一人を

捨てようとしている話(『今昔物語』卷十九—四十三)。また、宮仕えの若い女は父母親類もなく「若シ病ナドセム時ニ、イカガセム(もし病氣になったら、どうしようか)」と心細く思っていたが、「指セテル夫(これと定まった夫)」もなくて懐妊し、山深い北山科で出産したが、一度は赤子をそこへ捨てようと思っている話(『今昔物語』卷一十七—十五)。

こうした捨子はまず犬に食われる運命をたどった。たとえば「家高キ君達」には正妻の産んだ女子のほかに親しい女房が産んだ女子がいたが、正妻の乳母が下女に女房の産んだ子を「落トシ棄テ狗ニ食ハセテヨ(おつぼり出して犬に食わせちゃいなさい)」と指示している(『今昔物語』卷三十一—二〇)。高貴な身分の生まれでも山野に捨てられ犬に食われることは珍しくはなかったのである。

また、父母、特に母親に捨子の意志がなくても、父母などの保護者の死によって孤児に転落する場合があった。さきに述べた左近衛府の厨家の下女の女童は、下女が死んだことにより「依止するところなく」孤児となっていた。下女が貧しい中やつの思いで子供を成長させても、自身の死亡によって、その子供は孤児とならざるをえない。つまり、捨子だけではなく孤児も平安京の下層の住民から多く生まれたといつてよい。

当時の法律ともいえる延喜式では京中

の「路辺(路頭、路上のこと)」の病者・孤児は施薬院や悲田院に收容されるように規定されていた。しかし、わずかな例を除いて、それが実施された形跡はない。平安京における社会的な救済機能はほとんど有名無実であった。とはいえ病者や孤児にも生活の場ともいえる場所がささやかながら存在した。弘仁六年(八一五)に外国からの使者が滞在してもらうための施設である鴻臚館が病者の生活の場に活用されていたという記録がある。つまり、京の中には多くの不用の施設が存在し、それが病者のために用いられたのである。平安京では不用な施設や管理が十分ではない家屋は開放的で活用が可能であった。そんな中でも多くの病者・孤児が生活の場としていたのは規模の大きく開放的な、そして公共的な門、たとえば羅城門や内裏の朱雀門、達智門、待賢門などといった門とその付属施設であった。このような門は大規模で、しかも厳重に衛士によって守られてはいなかった。衛士は早くから内裏内の雑役に使われており、九・一〇世紀には門を守るといふ軍事的な意味は失つていて門はまったくの開放状態であった。貴族の邸宅や一般の住宅の門も同じような状態であった。大きな門はしっかりとした建築物であり、屋根もあるので雨・露もしのげた。病者や孤児にとつてはかっこうの生活の場であった。ただし、いいことだけでなく開放的な「門」は危険もあった。す

で述べてきたように犬に襲われもしたろうし、牛や馬に踏み殺されることもあったろう。当時の社会体制から放り出され、孤住し一人一人がバラバラとなつていた病人や孤児にとつて「枕草子」「源氏物語」が書かれた時代は誠に厳しい時代であった。

こんな暗い話をここまで付き合つて読んできてくれた皆さんには感謝したいが、いまま少し付き合つていただきたい。最後に少し明るい話題を紹介したいと思う。

捨てる神あれば拾う神あり。「今昔物語」卷十二の五話にはこんな話もある。

高貴な生まれで慈悲深い世間で評判の高い睿実(みこころ)という高僧が円融天皇が重い病気になられたので宮中からお召しがあつた。使いの者とともに天皇のもとへ行く途中で土御門大路に薦(こま)一枚を引きめぐらし病人が臥せつていた。見れば女で髪は乱れ「見苦しき」物を腰に引きかけているだけであり、流行病にかかっているようであった。睿実は「内裏には立派な僧侶が多くいます。私はこの病人に何かを食べさせた後に参りましょう。」と使いの者に言う。牛車からおりた。天皇の命令を無視するとは、と使いの者が見ていると、睿実は汚く恐ろしい病人に優しい接し欲しい物を聞いて自らの手で料理して食べさせた。それから内裏に行き誦経すると天皇の病はたちまち癒えた、という。病者や孤児の救済はわずかであ

つても一握りの宗教者によって担われたのである。また、「今昔物語」卷十七の一話には次のような話がある。

常陸国の身分の低い下人の家に泊まつた僧が聞いたのは十五、六歳の牛飼の童の泣き叫ぶ声であった。父親が早く死んだので、この童が主人の家に牛飼の童として雇われ、常に主人に打ち責められて泣いていたのである。すでに三年の間、打ち責められていたとあるから、十二、三歳から働いていたことになる。地藏丸と名づけられていたこの童は実は菩薩の化身だったという。父が早く亡くなったり、同居しない関係で子を産んだりしたとき、母子で生活しなくてはならない。貴族層でもない限り母だけでなく子供も生活を支えるために一生懸命に働き働いていたのである。中世の絵巻物の中では大人たちに混じつて働く子供たちの姿が多く描かれている。その姿はけなげであり、そして、たくましいといつてよい。路辺の病者に手をさしのべる人、たくましく生きている子供たち。絶望に満ちた世のわずかな光明であるが、それが筆者の陰々滅々とした気分を少しやわらげてくれる。

我がおくのほそ道の旅(3)

成瀬 和之

最上川

「最上川を船で下ろうと、大石田というところで天気がよくなるのを待つ。この土地にはふとした縁から古風の俳諧が伝わり、それがもとになって、今も忘れずに往時の遺風を慕い、蘆笛一声に慰む辺士の民の心を俳諧によって風雅にやわらげつつ、まるで暗夜にさぐり足をしながら歩くような調子で、俳諧の古風・新風いずれへ進もうかと迷っているけれども、どうもしかるべく指導してくれる人がいないので、と熱心に乞われるままに、やむにやまれず一卷の連句を残しとどめる仕儀となった。須賀川歌仙に始まる今度の奥の旅の風流韻事は、この素朴で熱心な人々の風雅においてきわまつたかの観がある。

最上川は陸奥に源を発し、山形領を川上としている。基点・隼などという恐ろしい難所もある。歌枕で知られた板敷山の北を流れて、しまいには酒田の海に注ぐ。左右には山が覆いかぶさるように迫り、樹木の茂みの中に舟を漕ぎ下した。この舟に稲を積んだのを、古歌に稲船とはいうのであるらしい。白糸の滝は青葉の間々に落ち、仙人堂は川岸に臨んで建っている。水は満々とみなぎり流れて、舟は今にもくつがえりそうだ。

五月雨を集めて早し最上川

——この日ごろ陸奥・山形の山野に降り注ぐ五月雨を集めて水量を増し、水勢いよいよ急に流れ下ってゆく。何と豪壮な最上の急流よ。——」（「新版おくのほそ道」 角川ソフィア文庫 現代語訳）

最上川は福島県との県境にある吾妻山北面を源流とし、山形県をほぼ南北に流れ、酒田で日本海に注ぐ全長二二九キロの大河である。芭蕉と曾良は立石寺をあとにすると、出羽三山へ向かう。この二つの聖地をつなぐのが最上川である。山寺から最上川沿いに車で走ったが、とにかく長い。関西ナンバーの車はごくまれで、関西人にとっては「みちのく」であることを実感する。大石田は、最上川の水運で栄えた街である。この地は古くから俳諧文化が根付いた土地であった。芭蕉は大石田の俳人たちに請われて歌仙を興行し、「この旅の風流、ここに至れり」と満足した気持ちを書き。江戸時代、米や尾花沢の紅花などの物産が舟で河口の酒田へ、そこからは北前船で、西回り航路を通り大阪へ運ばれた。鉄道やトラックのない当時、水運は物流の中心であったのだ。そのため大石田や坂田の街には、その水運で財を成した商人がおり、俳諧文化が根付いたというわけだ。

大石田での歌仙の発句として芭蕉は、五月雨をあつめてすずしもがみ川

と詠んだ。「おくのほそ道」では、「すずし」を「早し」と直している。河川の発句として詠んだとき、芭蕉はまだ舟に

乗っていない。つまり岸から眺めた最上川の影響が「すずし」である。さらにこの「すずし」は土地の人々への挨拶でもある。一方、「おくのほそ道」に入れた句は船に乗り込んで最上川を下りながら詠んだ句である。「早し」は激流を下るとき最上川の影響である。芭蕉は船に乗って激流に乗り出し、大河と一体になった。その結果、句には躍動感があふれている。一語の選択に改善の努力を惜しまない、芭蕉の姿勢がここでも、みてとれる。推敲に推敲を重ねて、文学作品「おくのほそ道」は創られた。

今回、最上川下りの乗船場を見過し、舟に乗り損ねたが、保津川下りをしたことがある。船底を擦り、水しぶきを浴びて、川と一体となり、臨場感あふれる体験であった。今度最上川を再訪する折には、是非「最上川下り」を試してみたい。

なお「仙人堂」は源義経の従臣常陸坊海尊の遺跡と伝えられる。平泉で示した義経への鎮魂の情がここにも垣間見える。芭蕉と曾良は一気に酒田まで下らず、途中で舟を降りて次は出羽三山へ詣でる。

参考図書：NHKテキスト「おくのほそ道」
（長谷川權）

米国紀行(4)

河原林 成行

首都ワシントン探訪

一九九七年五月二日

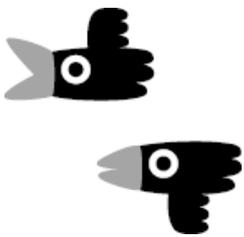
今回は、こんなに早く来れるとは、いや来れることさえ思っていなかったし、来たいとも思っていなかったのに実現してしまったワシントンD.C.について書きます。

まったく、交通事故のようなもので、世の中、出会い頭に何が起るか分かりません。

テニスの最高峰といわれるウインブルドン大会で日本人選手が何かのハズミで間違つて(?)決勝戦まで行ってしまったようなものです。あなたが今いきなり、常務取締役・技術研究所長にご指名されてしまったようなものです(イ、イヤ、失礼)。「いつかは…」とは思いますが、マ、それはともかく、それだけに、心の準備も下調べも何もできていません。TVや新聞にもよく出てくるあの「ワシントン」やろ……。

五月二日(金)、快晴。

米国へ来て二日目です。新緑の美しい、とてもいい季節です。ネディーンによると、「今が一番いいシーズン」とのことです。体内時計はまだ日本時間で動いているようです。今朝はユックリ起きたおかげでネディーンやジョンとも会うことができ、ネディーンとの咄嗟の計らいで間一



髪、マツダの若い技術者・ヨリザさんに同乗させてもらってワシントンDCへ行くことになりました。米国でも、車は必需品です(??)。

ヨリザネさんは、シツカリもののように見える奥さんと二才の女の子を同行した、とてもハキハキとした歯切れのいい方でした。奥さんにはチョット弱そうだけど(ウチやネディーンのココやこれを読んでる人のココと一緒で)。私の目からはみんなそう見えるのかなア??

それはともかく、彼は海外旅行が好きで地球上のあちこちを散歩しているのだそうです。ここ(ボルチモア郊外の「ザ・コンフォート・イン」へ来るまでに、フロリダのマイアミで三泊し、カリブの海を楽しんできたそうです)。

当地には、まだ独身ながら日本のあの音響メーカーの現地出張所の所長を勤める彼の大学時代の同期生がおり、そこで宿泊したそうです。その同期生の家(?)には、テニスコートやプールがあるそうです。

このような話はそこだけを聞くと「何ともリッチな海外での別荘生活あるいは海外旅行で羨ましい」と錯覚(??)してしまう危険性があります。たとえ本当だとしても……?。ましてや、その辺の事情は何も知らず、米国へ来ただけで感懐して友人に「ついに、アメリカの土を踏みました」と絵ハガキに書いて有頂天の妻の前でもらっては大変困ります。何も聞かなかったことにします。

でも、彼の奥様については「自分の目

でシツカリと見聞し、それこそ何もかも経験されている訳です。その結果、お二人の人生行路の役割が決まったように(勝手ながら)思われます。彼の役割が少し気がかりになってきました。そんな私の心配(?)をよそに、彼はベラベラしゃべります。チョット軽いところもあります。それが彼のいい所でもあり、取り柄なのでしょうが、一歩間違えば大きな欠点ともなります。

時に奥様の同意を求めたり、話に入っでこさせようとしています。奥様も話すのですが、何か私には「心ここにあらず」の感じがします。彼の最大の長所をよくご存知の奥様は、彼の最大の欠点もよくくご存知なのでしょう??

そのうち、彼はハイウェイ(自動車専用高速道路)の出口を間違えます。一応、ナビゲータは助手席の私が道路地図を持ってやっているのですが、訳の分からない子供に頼んでいようなものです。「マア、間違った場合は、この出口をこう出て、右折、右折で行けば元へ戻れるのですよ」ととっても簡単に、樂觀的に言われるのですが、事態はそう簡単にはよくならないようです。こうやってウロウロしている場所は、曲がりなりにもハイウェイ(自動車専用高速道路)ですので、よく考えてみればとても危険な状態にあるわけです。私は思わずシートベルトを締め直しました。そのうち、出口トライの一回目の間違いは何とか彼のテクニクでうまく切り抜けられました。奥様も少しイライラされただけで済みました。

彼が、カリブ海の話をしなければいいのです。

しばらくは何事もなく過ぎましたが、今度は二回目の間違いです。今度は奥様が遂に、「マタア?」と口にされます。私もナビゲータをやっていると思ったのですが、確かにこのハイウェイ(自動車専用高速道路)は、日本と比べて道路案内板も極めて少なく、本線と出口の区別も難しいようです。

突然、「出口8A」などという標示が出てきて、「A?何?」、「地図にないよ」などと喋っているうちに通り過ぎてしまうのです。出口への道幅の方が本線より広かったりネ。

また、出口の表示も番号だけで「どこへの出口なのか」、地名がありません。京都から大阪へ行くのに、途中、茨木や吹田の標示がなく、「出口番号」だけが標示されているようなものです。ハイウェイ(自動車専用高速道路)ですから自分の進路の判断を瞬時にしなければなりませんので、慣れないと、これはチョット走り辛いと思います。この国の合理主義なのでしょう??

にわか「国際ナビゲータ」としては、次の次まで読まなければなりません。チョット、プレッシャーです。ここまでは、一回のミスで来られたのが不思議なくらいです。

今回も、彼は陽気で、楽天的に「こう行けば……」と言って、何とか本線復帰を果たしてくれませんが、冷や汗ものですね。奥様は、「本当にあつてるの?」と心配さ

れています。

やがて、道路も少し混んできます。「ワシントンに近づいてきたのですよ」とヨリザネさん。時間的にも、当初の予定の一時間を回っています。ここでもどめの三回目のミス発生。今回は彼が我々の為に「ワシントンDCの観光の出发点となるモールへ送って置いてやるよ」と気を利かしてくれたのですが、それがアダになって、下手をするとボルチモア・ワシントン国際空港へ戻ってしまうようなミスです。彼らは一度ワシントンDCへ来たことがあり、ある程度この辺りを知っているのです。その時に、ワシントンDCの夜景を見ることができなかったのが、今回折角なのでホテルを探して、ここで泊まろうとしているのです。ワシントンDCの夜景はそれほど素晴らしいのだからです。

いや、それとも実は、カリブでリッチな生活を知ってしまったので今更、三泊二〇〇ドルのあんな(?)「ザ・コンフォート・イン」には泊まれないのか、それは知りません。ともかく、少々(?)高くついてもいいから、夜のワシントンDCを見たいのだそうです。

話は外れましたが、我々は道に迷っているのです。すでにハイウェイからは外れていますので、一般道路地図を見ます。大変狭い道を通ったり、大きなトラックとすれすれですれ違ったりしながらも、彼は、「海岸通りへ出ればいいんだ」と言って、車を走らせます。奥様が、任せられないとばかりに後部座席から身を乗り

出して来られます。私も慣れない地図を必死に見ます。

どうやら我々は、ワシントンDCの北東部でウロウロしていることが分かり、一度ハイウェイへ戻り、出口を変えることにしました。モールは諦めて中心部の公園のある方へ行くことにしたのです。というよりも、ここからでは、それしか仕方がないのです。

とにかく基本的な方向性が決まってい安心。今度は、大丈夫なようです。あとは運転の上手なヨリザさんにお任せです。一時間半かかってようやく到着です。

「ここがワシントンDC？」と思われるような公園の真ん中で、「ジャ、ここで」と言っ降ろされてしまいました。「どうも有難う。気をつけて」と言っ別れたものの、西も東も分かりません。えらいことになりました。

せめて、ワシントンDCの外周くらいは案内してくれるのかと思っましたが、「やはり二才児もいることだし仕方がないな」、「これからどうしよう」としぼしぼ然です。

翌日、ネディーンの結婚式のときに「ワシントンDCは初めてだったんです。あんな所で降ろしてしまい済みませんでした。もう少し一緒に行動した方がよかったですね。でも、駐車場からはズッと遠くなると思っ、中心部に近いあそこで降りてもらったのです」とのことでした。彼らは、一泊二〇〇ドル（当地での標準的な価格とのこと）と予定より少し高くついたらうえに、目的(?)は果

たせなかつたそうです。何故かは知りません。

ちなみに、ヨリザさんはネディーンと一緒に、フォード社の弱点であるRV車の開発戦略プロジェクトで仕事をするそうです。他人ごとながらチョット心配です。ジョンは別動隊とのこと。

お札に昼食でも一緒にして別れる予定だったのが大きく狂い、何も知らない我々だけが見知らぬ土地にポツンと置き去りにされてしまいました。緑の芝生や木々に覆われた公園と駐車してある車以外何も無い所、昼食時なのにレストランらしきものもない所で呆然です。処が、それは我々に見えなかつただけだったのです。「ザ・ホワイトハウス」や国会議事堂、ワシントン記念塔や各種記念館、官公庁の建物などの立ち並ぶワシントンDCのど真ん中にいきなり入り込んでいたために、全貌やその一端すら見えなかつただけだったのです。いきなり「台風の目」に飛び込んでいたのです。

それはまるで、巨大な恐竜の足元について、さらに下を向いていたためにその姿が見えないようなものだったのです。



インターネット老人会

大江 雉鬼

数ヶ月ほど前の話、「インターネット老人会」なるものがネット界隈で話題を集めていた。何のことかという、二〇〇〇年頃に使われていたインターネット関連のテクニカルチームやツールを取り上げ、そこに「#インターネット老人会」と添えた投稿をツイッターで行うことである。「#」はツイッターのローカルルールで、テーマを#(正確には半角)に続けて記すことで趣旨を明確にしたり、検索にひっかかりやすくする。このケースに即して言えばここでは「インターネット老人会」に関連する話題を提供します」と宣言していることになる。具体的にはダイヤルアップ時代の事象や、ブログとかSNSとかが存在しなかつた個人サイト全盛時代の習慣を話題として持ち出したりする。たとえばモデムの呼び出し音。当時は、インターネットに接続する手順として、電話回線に繋がれたモデムと呼ばれる装置を用いて特定の番号(アクセスポイント)に電話をかけてネット接続をおこなうのが一般的だった。その際、アクセスポイントに繋がるまでの独特の呼び出し音が数秒ほど流れるのだが、そのビー・・・バリバリ・・・という音は最近のスマホ世代には縁のない話だろう。それだけに「老人会」を自称するメンツには懐かしくも聞こえてしまう。

インターネットに開設するホームページにしても、近年では個人でサイトを運営するよりはブログやSNSを利用するのが普通であるのに対して、一昔前は個人でタグの使い方を学習して一からホームページを作るのが普通だった。そしてそういうやり方で作られたホームページには、暗黙のうちに成立した共通のルールがあったりする。アクセス数が多い少ないに関わりなく、とりあえずはアクセスカウンターを設置して、これまでのアクセス数を誇示する(實際上、誇示に値するアクセス数になるケースはほとんどない)。そして一〇〇〇番目や二〇〇〇番目のアクセスに対しては、少し変わった挙動をするようにサイトに仕込んでおく。そうした時の節目の番号を「キリ番」と呼んで特別視するのは、アクセスカウンター全盛だったがゆえの風潮だろう。さて、こうしたほんの十年から十五年ほどしか経っていない頃の話なのに、遠いままざしで太古の昔を思い出すように語ってしまうのは、一にも二にもコンピュータおよびインターネットの世界における技術革新が凄まじく早いからである。パソコンやスマホの機種にしても二、三年ほど前のものなら一世代前と見なされるほどのことから、十年や十五年となると「老人会」を称したくなるのも宜からんといいところだ。さらにはパーソナルコンピュータの普及期である一九八〇年代後半から一九九〇年代前半の話と

なると、それこそ博物館の司書が文化遺産を解説するかのような調子になってしまふ。「冗談抜きで、縁側に腰をかけてお茶を啜りながら「儂の若い頃はなあ〜」といったノリで語り出される伝承の世界である。実際、コンピュータを起動させるためには一辺が二〇センチ程度の大きな外部ディスク（8インチフロッピーに記録されたシステムディスク）を読み込ませねばならなかった時代もあった云々とかの話がスマホ世代に向かって語ったところで理解してもらえとは思えない。と、こういった具合なので「インターネット老人会」なるものが面白可笑しく語られるのは納得のいく話なのだが、いくつか並ぶ投稿の中には「この言葉が全部理解できたあなたはめでたく老人会認定」とかいいた調子で、「キボンス」や「香具師」などネット掲示板でかつては普通に使われていたスラングを並べているものもあった。十年二十年前の技術的な話を取り上げ、その時代を知っていることを自虐的に語るのとは違い、いくぶん愚弄気味にも感じられて気分のいいものではなかったのだが、用いている語彙の新旧で格付けをしたがる連中には、いま現在「ごく当たり前に使われている言葉が二年か三年経った後には死語となり、それを使うことが指弾の理由となる時が来る」ということも知ってもらいたいものである。

ところで、このように極めて表層的な

ところで流れ去っていくものもあれば、本質的な根っここのところと結びついて確固たる存在感を持つようになつたものもある。コンピュータにまつわるところで続けるのであれば、コンピュータの上で動いているソフトウェアの仕様は時代とともに変わるだろうが、コンピュータの存在自体は消えてなくなったりはしない。コンピュータが専門技術者の囲い込みを離れて一般社会に普及し始めた四半世紀前には、これからはコンピュータの存在が当たり前になってくるから本腰を入れて使い方をマスターした方がいいと考えたものである。コンピュータが進化したとしてもコンピュータを使って何かを行うという作業スタイルは変わりほしくないだろうと考えたのである。だからこそ、コンピュータの根幹であるハードウェアやOSについては、少し突っ込んだ形で理解できるように心がけてきた。結果、パーツから組み立てや既存のソフトウェアを組み合わせてのシステム構築までなら、どうにか自力で対応できるぐらいにはなつたつもりなのだが（電子部品の工作やプログラム制作は無理）、近年の風潮は何か別な方向に流れているように感じている。それは、パソコンは使えなくても構わない、スマホで十分という雰囲気である。以前にも少し書いたが、スマートフォン（高機能携帯端末）については、デスクトップPCを比較の対象とするなら、遥かに低機能機器であるとの認識があるため、これまで本格的に向き合

って来なかった。しかし、通り一遍の機能はタッチひとつで適当にごまかしが利くようにアプリのレベルで設定されているようだ。スマホの中で、どのような操作が行われ、どのような情報が飛び交っているのかを詳しく知らなくても、表面的なところでの不足を感じさせないよう仕組まれている気配である。トラブルが発生した時に現象の切り分けが出来るかといったレベルを問題にするなら、原理的なところを理解しているのとそうでないのとでは雲泥の差が生じるのだが、当面は必要がないだろうという形でスマホ的運用に大勢が押し流されているように感じられる。コンピュータの自作や、オリジナルの用途に合わせたシステム構築など、一部の好事家が手を出す程度のものという風潮になってしまっているように思われるということである。売ってなんぼという企業側の事情に寄り添った場合、限られた材料で工夫されるよりは、どんどん供給し続ける新製品を購入してもらう方がいい。そうした意味では、最近の風潮は企業論理に即した戦略が奏功しているのだろうが、それに乗っかって当面の不足は感じないと思いつまみされている連中から冷たいまなざしを向けられるのは、どこかキリギリスに笑われているアリのようにも思えてならない。と、こうした愚痴を並べていること自体が老人会の証となるのだろう。

編集後記

やっぱり、二月は早く過ぎた。しかし、商人にはつらい月である。二月と八月は客入りが少ないから金策に困る。巷の不況感強い。零細業者はアップアップの状態だ。

時たま行く飲み屋も安い所しか流行っていない。二〇〇〇円か一五〇〇円ぐらいのカラオケスナックや飲み屋、立ち飲み屋なら七〇〇円ぐらいいだ。

さて景気の悪い話は棚上げて、恒例の「懇親会」を五月七日・十二時からやります。会費は二〇〇〇円、参加自由です。今回のテーマは

「もし、総理大臣になったら是非ともやりたいこと」

ちなみに、私は借金をチャラにする徳政令が一番にやりたい。借金に苦しむ人を助けたい。

次に、公務員の数を増やしたい。職のない人や過疎地の農林業者を公務員にして生活の安定、公務員の給料は半減して数を倍増する。

地方議員・国会議員も同じく倍増して給料は半減。定年制は廃止し、年金制度も廃止。死ぬまで働ける職場を作る。

芥川だより懇親会

五月七日（日）十二時から

芥川商協会館

会費・二〇〇〇円

参加自由、参加希望の方は、連絡ください。酒と肴を用意します。

不安解消

お寺参りに気をとられ、寒さも何のその、雪がちらつく、ああしんど腰を伸ばして自分の姿をガラス越しに見る。あれっ、これが私なのか…。まあいいや…。

人気のない店舗に、おひなさんがきれいに飾ってある、イスまで置いて「ゆっくり見てあげてください」という立札に二度びっくり、立ち止まって見る人「私の子供時代のお雛さんやネ、口々にしゃべりながらすぎてゆく人。ひな祭りは、五節句の一つ、女の子の幸せを願う。厄を人形にうつして払う風習は平安時代からとのこと今も続いている。長寿の望みはなくなったといえる。

平均寿命は男女共八〇歳を超えた。女性は、八十六・八才、三年連続で世界一、それに伴って心配なのが認知症である。アンケートの結果を見ると老後最も不安に思う病気がガンを抜いて認知症が一位という。認知症の男性が（当時九十一才）徘徊中に電車にはねられ死亡した事故をめぐり、認知症の老後の介護は、これからまだまだ増えていく。二十四時間見守るのはむずかしい、こんな事を考えながら鉛筆を走らせていたら訪問者あり、まあ入って

と気を許した。私の孫くらい年齢かなア、いろんな話を交えて「あんならどうする」と突然話の糸口を向けたら「僕たちが考えなくても僕には七〇代の両親がいるから、その事は大丈夫だと思う」「何が大丈夫なの」と鋭く聞く「認知症らしい人が歩いていたら、あんたならどうする」「見て見ぬふりをするのかどうする」「見かけたなら声をかけてみる、出来る対処はしてあげる」という。あんたはえらい！。

よし一口その何とかやらに加入しよう。来るべき社会に備えるために。世の中ままならぬ

「おばあちゃん、これから家へゆくわ」電話があり、私はいそいそと食べ物準備に心が忙ぐ。

ピンポン、はや来ちゃったのか。久しく見ない間に年齢に相応しい落ち着きを見せている。墓参りに行きたいということ、早速お墓へ、全体を見渡してびっくり。花屋さんの展示会みたい。立派な花が供えられている。

「こんな事は、お盆とお正月だけや」これだけ並んでいるのだから、月に二、三人の命日はあるだろうに、こんな花屋風景は月一回の墓参り

には見たことがない。続けられないことはせんことじや。さあ、ばあさんのボヤキが始まったと孫は笑う。今年からは、このボヤキはやめることに決めた。日々のニュースは暗いことが多い。

ニュースとはそんなものだ。火事家が焼けたらニュースになるけど、隣の人が気づいてみんなで協力して消し止めたならニュースにならない。

良い行いは、知られないことの方が多し。交通ルールを守ってもニュースにならないけれど、違反して事故を起こしたらニュースになる。

世の中の大部分の人は、ルールを守っている。普通の人たちの頑張りが社会を支えている。転んだ人を助け起こし財布を拾ったら交番に届け、募金したり、ボランティアをしたり、みんなが日々なにかしら人のため社会のために、小さく貢献しておられる。そんな人たちが少しも表に出されないのは何故なのか。良くも悪しくも世の中を良くしたいなら、いいところをもっと意識したら。

ある人はぼやく。「そんなに言うのならあんたがもっと明るくしなさい」と。

俳句

土田 裕

手押し井戸ひと漕ぎごとに水温む
白梅の辺りを払ふ気品かな

すれ違ふ春セーターの眩しけれ
鶯の次の声待つ静寂かな

酒星や美味し国にはうまき酒

影山武司

春の色尾根行く道のなだらかに
貝殻を寄せては返す春の波
薄衣を重ねるごとく春の波

独り居の鬼の面置き年の豆
嬰兒のただ泣くばかり鬼やらひ
古書店に漏るる灯や夜朧

そつと指押し当ててみる薄氷
春泥の光跳ね上げ鬼ごっこ
盛り場の暗がりの路地うかれ猫

越えられぬ塚のあらむ猫の恋
湯の街のそぞろ歩きや花明り